

見して直ちに良不良を鑑別し得るやうになると云ふことである。

此話して我輩はフト、ヒントを與へられて考へた、今の政治經濟一切の仕組及び世人の説く所は、純金ばかりで無くて、善惡混淆、玉石一器である、されば眞金贋金混合せる世の議論に耳目を觸れしむるは、却つて目を惑はせられるやうに、大なる毒である。先づ三四年間は我國の事物に目を閉ちて西洋の書籍を閱讀し、胸中に一天地を具ふるに至ることが必要であると、其地を得るために我輩は地方の分校を引き受けた。

三四年の歲月をこうして送つた後、漸く臆る氣ながら、百年の關係と其本義とを知り得て、胸中に一天地を備へ得たやうに覺えたから時機は方に可なりと信じて、一文を草して報知新聞に送つた所が、其頃のことであるから多少人の注意を惹いたと見えたが、程無く歸京すると、報知新聞から聘せられたので、主筆の藤田を援けて、三日に一回位論説を起

草する約束で、マア遊軍と云ふ格で入社した、これが我輩の新聞に關係した最初である。

此新聞記者生活が二三年續いて、大隈さんの下に、政府に入ることゝなつたが、それは改めて後に話すことにしよう。

五、初めて島田三郎を知る

——西南の亂に一畫策——

島田三郎君は我輩や慶應義塾の關係でなく、沼間守一の一派たる嚶鳴社組の一人であつたが、我輩が初めて島田君を知た時は何でも明治十年の西南戦争の騒ぎの頃であつたと思ふ、其時に島田君の演説を初めて聞いたのである、それは當時愈々西郷が薩摩に旗を翻して世の中は何うなるか分らぬ實に物情騒然となつた、所が沼間と云ふ男が却々謀叛氣が

手に唾して
蹶起すべし

陸奥を説得

初めて島田三郎を知る
三
あつて面白い男であつたし、我々も未だ二十歳代の血氣盛りで、何か事
有れかしと思つて居る時である、サア愈々西郷が事を擧げた世の中は何
うなるか分らぬ——其時は未だ西郷が熊本に達せぬ以前である——これ
は天下の大亂だ、此秋此際我々も何事か考慮を費さざる可らずと云ふ譯
で所謂手に唾して蹶起すべしとなした。

そこで愈々天下蜂の巢の如くに亂れたならば、全國に檄を飛ばし、一
方西郷にも説いて全国各地から名代を出して代議政體を開かう、是れが
沼間と我等と二人の眼目の秘策であつた。又大亂となつて來たなら東京
市をハンブルグの如き自治の自由都市にしよう即ち自衛の都府としなけ
ればならぬと云ふ具合で、其下地に就て我輩と沼間とが相談した、陸奥
宗光は謀叛氣がある男だから、仲間に入れようと云ふ企で其事で我
輩が陸奥を説得に行つた、陸奥は其時元老院の議員であつたが、我輩の

意味深長な
陸奥の一言

一人の青年

説く所をきいて、頗る煮え切らぬ返事をして何か考へて居たやうであつ
たが、他言して呉れては宜しくないが、政府は未だ悲觀して居ない、政府
が『弱はれば面白いのだが、政府は頗る樂觀してるよ』と云つて居た。後
至て、彼奴も一の企を持って居た事が分つたことではあるが、極めて意
味深長なことを云ふて居た。

併し、此方は何でもいゝ構ふものか。陸奥なんかどうでもよい自衛の
爲めとか何とか云つて仲間になりそうな人を集めて見ようではないかと
云ふ譯で、同志の連中が集まつた、それは何でも京橋邊の某館で二三十
人の發頭人が此處に會合した、我輩と沼間の二人は胸に秘計を蓄へて居
たのだ、何れも血氣盛んな事を好む連中ばかりであつた、演説と云ふ程
でもないが、みんなで各々意見を吐いた、其時一人の青年が出て演説を
やつた、それが非常に巧いものであつたから後で、一體あの青年は何人

初めて島田三郎を知る

初て島田三郎を知る
だと沼間に聞くと、沼間が「あれは島田三郎と云ふ男だ」と教へて呉れた、我輩は、其時初めて島田を知つたのである。

其會の後二三日を経て沼間の家で二人が將來のことを謀つたが、其時に我輩はこう云つた。——其時熊本に薩兵が將に達せんとして居た——若し熊本の司令官が城内に退いて固守すれば西郷は熊本をよう落とさなう、然し若し熊本軍が城を出て敵を邀へ撃つと云ふ積極的に出れば、西郷等の勝ちで西郷勢は忽ちにして馬關まで押し寄せて来るであらう、要するに戦ひの勝敗は熊本軍の攻守如何に在るのみ。夫れに依つて天下の事は決するが、今少しく之を待たねばならぬと云ふのが我輩の見込であつた。當時の少年としては割合に氣の利いた意見であつた。すると、沼間が云ふにはイヤ、ナニ熊本軍は屹度出て戦ふに相違無いとこれは沼間としては左様に見當をつける理由があつたのである。

六、沼間守一と西南の亂

——余は退て京都に赴く——

沼間が熊本軍が城を出て邀へ討つに相違ないと云ふた理由はかうである。沼間が云ふには「乃公は熊本の司令官を知つて居る、土佐の奴で谷干城と云ふ男だ、あの男ならキツト出て戦ふに相違ない」と云ふ、それは沼間は維新の亂の時に何でも上野か下野かの野での戦に板垣の率る土佐の兵は沼間のために非常に惱まされた、そこで亂平いだる後板垣の勸めで土州藩は沼間を聘して兵事訓練をやらせた。かう云ふ關係で沼間は谷干城の技倆も性質もよく知つて居る『ドウも谷の奴事に依ると出て戦ふかも知れぬ』と云ふ、そこで我輩は『さうなると實に天下の大亂だ西郷は必ず馬關を渡つて来る、若し此方へ来るとせば天下これに響應するで

谷は必ず出るに相違ない

西郷は駄目

天下の形勢

あらうから武器の供給も充分になり、容易ならざる大變となるであらう……然しドウも熊本は出すに守るかも知れぬと思はれる」と云ふと、沼間は「イヤ谷の性質として必ず出るに相違ない、と云ふ互に議論したが二三日経つと谷は籠つて守ると云ふ報が来た、そこで我輩沼間に向つて『ドウだい谷は守つたぢやないか、谷が守つたら却々城は落ちない、其内に援兵が行けば西郷は駄目ぢや、九州も長崎の貿易港も、兵器も西郷には渡らぬから、今の政府は先づ安全、こりや全て計畫も見合せなければ不可ぬ』と云ふ譯で一切の目論見を中止した。

我輩は西郷勝たぬと愈々見切りをつけて、當時陛下(先帝)が京都にお出ましになつて居たので、新聞社の用を兼ねて——報知新聞記者として——京都に赴いた、それは其頃京都には木戸とか大久保とか云ふやうな連中が居たので、大に天下の形勢を見やうと云ふ譯であつた。其時我輩は初

巨頭京都に

伊藤の炯眼

めて木戸に逢つたが、間もなく木戸は病氣で京都の客舎に逝いた。後藤とか大久保とか云ふ巨頭が京都の行在所に集まつて居たが、果して豫期した通り西郷は遂に敗れて了つた。

其時伊藤さんの所であつたか、木戸さんの所であつたか一寸忘れたが伊藤さんの言葉の中に、紀州(陸奥宗光等の藩なり)の兵隊なんか使つたら、何方に向いて鐵砲を撃つか分りはしないと、意味深長な暗示的な言葉を云はれたことを記憶して居る、後に至て陸奥等の陰謀が政府へ知れて、それから一ヶ月程して陸奥宗光、大江卓、林有造等と云ふ連中が捕へられた。

斯くの如くにして西郷の亂の時我々も實は事あれかしと待つて居たのであるが、其時に兎に角京橋の某所に集つた連中の中に島田三郎君を初めて知つたのである。

沼間守一の人と爲り
偕て大隈さんや我々が政府を退た、明治十四年の政變に就ては、世の中では非常なる誤解と牽強附會とに陥つて居るやうである、敢て辯解する必要もないと思ふが、其時の我々の心事と、事の成行きとを表白すればこうである。

七、沼間守一の人と爲り

——乾坤一擲の氣骨稜々——

十四年の政變の話に移る前に話は一寸前後したが、沼間の話が出たから序でに茲で、亡友沼間のためにその人となりの一端を話して見たいと思ふ。

陸奥宗光等が薩南の西郷に應じて起つと云ふ陰謀の嫌疑で捕へられた後、沼間も亦た夫の前に記した事等が暗に累を爲して、遂に官を罷めら

れた、元來沼間は非常に自信の強い男であつたから、一方に味方がある代りに一方には澤山の敵が出来ると云ふ風であつた、それで後に改進黨を作つた時も、沼間が居る爲に、黨の強さを増したが、其代りに又黨の敵をも増したやうなこともあつた。

沼間は眼中に人無しと云ふ有様で、誰を見ても常に『彼奴は馬鹿だ』と云ふ癖があつた、實に沼間の評にかゝると天下に一人の人物無しである、人と闘ふ時は向ふ意氣の強い方であつた、詩も一寸出来る位の漢學の素養もあつた、其述懐に花晨月夕得意稀などの句を聞いたことを記憶して居る。時々我輩と二人差し向ひで、新橋邊に淺酌低唱し互に古今の英雄を罵て懷を遣る事もあつたが、折々我輩に向つて『大局を達観して、利害を永遠に決するの明に至つては、僕はドウモ君に一蹶を輸すると思ふて居るが、然し成敗を度外に措き、運命を一擲に決するの段に至

政變當時の大隈派

つては、或は僕に一日の長があるかと思ふ」などと云ふて、互に大笑しつゝあつた。誠に面白い人物で其頃は我輩が二十代、沼間が三十代で我輩よりは七八歳の年長であつた。彼れが野に退いてから十有餘年に互り一人で東京市會を左右するの権力を握つて居たのを見ても、其力量は大慨察せられる、氣骨稜々の快男子であつたが、これも早く死んだ惜しい男である。

八、政變當時の大隈派

——四圍の情勢頗る危険——

明治十四年の政變に就ては當時の我々の心事と、世の中の推察とが大分違つて居るやうである、誤解もある様だし牽強附會もあるやうで、今まで世間に傳へられて居る所謂真相なるものは大分間違つて居る、勝て

政變當時の大隈派

ば官軍負れば賊で、歴史と云ふものも時の勢力の強いものに都合のいゝやうに出来て居る部分が大分あるやうである。況んや當時の事情關係は却々複雑で、色々な反間苦肉が用ひられた、これ等の關係のために非常な誤りも流布されて居る。恰度其時のことである、我輩が故國に歸省して秋の初め頃東京に歸つて來ると、當時大藏卿をして居た佐野常民が、我輩に向つて『君は此間鹿兒島方面へ行つて盛んに政府攻撃の演説等して大いに人心を煽動したと云ふではないか、政府の役人であつてそんなことをして呉れては誠に困るぢやないか』と云ふのである、我輩は全く驚いた、當時我輩は故國の大分以外には一步も出なかつたので全然根も葉も無いことである、そこで我輩はどう云ふ譯でそんなことを云ふのかと聞いて見ると薩摩人からの報告だと云ふのである、『そんな馬鹿なことは無い、我輩は郷里で魚取りばかりして居て大分縣外には一步も踏み出

しては居ない」と云ふた譯であつたが、さう云ふ流言が我輩個人に就てさへこれ位であつた位だから、他は推して知るべしである。

十四年の政變に就ては世間では其時の我々が何か陰謀でもしたやうに流布されて居るが、陰謀所ではない、當時の我々の心事は、其以前に於て現に我輩が書記官として内閣に二度までも上書して居る位である、それは立憲制度の必要を論じたもので公々然と二度までも建議して居るのである。

其時の我輩の心事は、立憲制度の必要なるを説いたので、其一つは所謂三勢論と云つて、安勢、危勢、亡勢の三勢を説いて、あゝすればどう、かうすればどうと公々然と建議したので、何も政府を倒さうとか、薩長の人を倒さうとか云ふのではない、自分等も其政府に居り、薩長も其政府の一勢力である、これを倒さうと云ふのではなくして、其人達を

大いに説いて正式な政治を布かせ、漸々に立憲制度に據らすやうにしよと云ふのであつて、薩長の勢力を全然覆へさうと云ふに非ずして、これを矯めて政府の基礎を固めようといふにあつた。即ち内閣が其基礎を陛下の御信任に繋るは當然ながら、一方には國民の力に依つてこれを支持しなければならぬ。斯くして人民の權利を伸張すると共に、内閣の基礎をも固くすべしと云ふので、其意は現政府をしてこれを行はしめんと欲したので、決して政府を覆へそうなど、云ふのでは無い。

然るに一方大隈さんの勢力と云ふものは、其頃次第に増して來たのでこれを快からず思つた人々は何等かの口實で大隈さんの勢力を覆へさうとした。これ等の人々が、唯一の口實としたのは、大隈は薩長を覆へして自ら野心を満たさんとして居るのだと云ふ風に引きつけて了つた、心ある者は知つて居たかも知れぬが、遂に此宣傳に欺かれて大隈は不都

合だ等と云ひ出した者もあるし、又大隈さんを傷つけるホンの口實のためには流布したものもある。

かう云ふ譯で當時大隈さんでも私でも何も薩長と同じ政府に居て、薩長の小股をすくふて獨り權力を占めやう等と云ふのではなかつたのであるが、事ここに至りしは、今にして考ふれば、大隈さんも少し注意が足らなかつた、と云ふのは大隈さん本人も、更に戒心の必要を認めず、周圍に居る我々も、戒心が足らなかつた。第一其時は、大隈さんは政府の首席政治家として、最も技術もあり萬端を切り廻して居たのである、素より伊藤、井上は友達であるが、其他の薩長の人達は伊藤や井上程親しくはない、殊に薩長は陸海軍に大勢力があるが、大隈さんはそれには全然勢力がない、表面當時の大隈さんの權勢は實に隆々たるもので全盛であつたが、實は根が甚しく透いて居た。根據が薄弱であつた、それで政

戒心足らず

根の透いた大隈の勢力

政府の首席

府の首席に居て、全てを切つて廻はしたのである。其地位の頗る危ふきことは、以て知るべしである、事あらば大隈を除かうと云ふことは、政府を形作つて居る團體の大部分に其考へがあつたと思はなければならぬ所が大隈さんもこれに對する戒心を怠つたし、我々は無論廿歳代で、そんなことが分る筈もなし、そこへ持つて来て、今一つの動機は經財上の問題である、當時經濟上では日本銀行は無く、正金銀行が半ば日本銀行の役目を勤め、大藏省も金融機關となつて居た、それ等が皆大隈さんの手に在つたが、一方にはそれ等經財上の勢力を、自分等に奪ひ取らなければ都合の悪い連中も大いにある、これ等の徒は何か事あれかしと待ち構へて居たのであつた。

財經の勢力

九、立憲制度の即行論

——福澤門下と大大隈派——

大隈さんの
危険な地位

前述べた通り、當時の大隈さんの地位は、頗る危険であつて、周囲からは實に虎視眈々として其隙を狙つて居た。何時爆發するか分らぬと云ふ噴火山上に在つた場合に、持上がつて來たのが、立憲制度實施の問題である。大隈さんや我々は、どうしても此儘では不可ぬ。早く立憲制度を布かねばならぬと信じた、此事は何も我々が其功を獨占しやうとか、陰謀をやらうとか云ふのではない、其事は既に伊藤や井上とも、岩倉さんとも公然と相談し合つたことである。岩倉公も略賛成はして居たが唯『それもよからう』位の所で、未だ踏み込んで主張するまでには行かなかつた。然し舊來の保守的な政府に、大いに新制度を布かうと云ふので

公然と相談

開拓使事件
の勃發

あるから、多數の保守派には頗る御意に叶はなかつた、所へ又勃發したのが、北海道官有物拂下事件である。囂々たる輿論の攻撃を目して、これは専ら大隈さん等の煽動だと做した。『大隈は實に怪しからぬ、政府の内輪に居りながら、輿論を煽動して、急激に變革を行ふとする』との非難でこれが遂に謀叛人だとの口實ともなつた。

然しこれは、少し考へて見れば分ること、立憲制度實施のために、若し我々が、眞個に開拓使拂下問題を攻撃するのであるならば、我々はどうしても、當時は一番に出て、其陣頭に立たなければならぬ人物であるのに、無論我々は其仲間にも入つて居らなければ、大隈さんも入つては居らぬ、而も日頃犬猿管ならぬの政府の御用新聞に居た福地等さへ加はつて居るので、天下の團體悉く起つた譯であつた、其中に慶應義塾關係の我々の親しい者が大分居つたので、我々も一緒に觀られたのみな

政府の御用
新聞

立憲制度の則行論

らす、福澤先生まで其参謀だと言ひ囃された、當時の開拓使事件の攻撃の火の手は實に猛烈でその一部に假令慶應出の我々の親しい者が入つて居たとて、これをどうするとも出来ぬ。然しそれが爲めに我々が一緒だと云ふのは、前にも話した如うに、當時大隈さんを倒さんと狙つて居る連中の口實に過ぎない。我々の當時の考へは開拓使事件位の所ではない。なるべく薩長有力者との間柄を圓滿にして、立憲制度の樹立に便にしたいと思つて居たのである。然るに事實は向ふの宣傳が成功して我々もこれ等の連中と、一緒にやつたと云ふ事に専ら言ひふらされた。これに就ては、政變の後我輩は福澤先生の所へ行つて曰ふた「今度の失敗原因は儘かに、我々慶應義塾連の進退が一致せざりしに在る。義塾出の人で、一部の人々は攻撃運動に加はるし、我々は加はつて居ないのに、さう見做されたのは是れは畢竟我々の間に脈絡を缺き、一致を失つ

立憲制度の則行論

て居た爲めではありませぬか」と先生も黙して首肯されて居られた。又これは福澤先生から私が直接聞いたのであるが、福澤先生は十四年の政變で、自ら伊藤井上の所へ、個人宛か連名であつたか知らぬが、態々手紙を遣つて「自分は今度と云ふ今度は政治家なるもの、交はりの淡泊なるに驚いた」と云ふ意味を書き送られたと云ふが、これは蓋し昨日まで同じ政府に居て仲善であつた者が、今日は敵味方と分れ、又其一人が政府を去つても、伊藤井上はそれを留めもせねば援けもせず、晏然として其位置に居る、今までは、色々自分にも相談をかけて置きながら、分れる時は何の沙汰なしで、而も別れ／＼になつて平氣で居れとは、今更ながら、政治家の交はりの淡泊なるに驚いたと云ふことを諷されたのである、其手紙は何處かにあらうと思ふが、これに觀ても福澤先生並びに三田派が、必ずしも大隈さんと一緒になつて、謀叛をしたとのみ云

ふことは出来ない。然し此時伊藤井上が、福澤先生の言ふ通りに動けなかつたのは、云ふに云はれな深い事情もあることである。一概に咎める譯にも行かぬ。

一〇、十四年政變の真相

— 交詢社で私擬憲法 —

我々は何も、出し抜いて、急激に立憲制度を布かうと云ふのではない。すつと以前に我輩が公々然と二度までも、内閣諸公に意見書を示して居る。これは大隈さんの意見は分つて居るが、特に他の諸公の注意を喚起した譯である。

一體我輩は父祖の庭訓と年少漢書を讀だ爲めとで早くから政理治術を研究する事が好きであつた。洋學に入り洋書を讀む目的も、當事流行の

公々然意見書

變應義塾の書館

窮理學杯に心を傾けたのでは無くて、歐米の政治制度を究めんとするにあつた。だから立憲制度の國家に大利あるを知ることは割合に早かつたのである。今から考へれば、其頃の慶應義塾の書館は實に貧弱なもので政治書は特に乏しく、五六百頁の米國憲法史の一卷が、最も大なる冊子であつた。それでも此書全篇を通讀した者は我輩が初めてで、他人は未だ之を通讀した者すらなかつたとは、其頃の塾の先輩の話であつた。故に我輩は比較的、人に先つて立憲政治を信すること堅く、野に在つて新聞に筆を執るも、其説く所は之れに外ならなかつた。政府に入るも亦た單に温飽の爲めのみではない、機を見てこれを行はしめんとするにあつた。

當事大隈さんは在朝第一の進歩主義者で、立憲政體の君民に判あるを知ることは早かつたのであるから、我輩と其所説は一致したのである。

在朝第一の進歩主義者

伊藤は漸進

小幡篤次郎

中上川彦次郎
馬場辰猪

十四年政變の真相

伊藤さんも分つては居たが、大隈さんに比すれば漸進であつた。大隈さんや我々のは、十年後に布かう杯と云ふ、悠然りしたもので無かつた。斯様に政府部内に在つて、大隈さんや我々が立憲制度の急を説いて居る一方に、矢張り慶應義塾関係の我々の仲間、小幡篤次郎——これは我々の中で、福澤先生に次ぐ一番の先輩——が、無論立憲制度を布かなければならぬが、と云つて、歐羅巴の憲法を其まゝ日本に持つて來ることも考へ物である。日本は日本としての、國に合つた憲法を一つ研究するの必要がありはしないかと云ひ出した、そこで我々六七人の者が、度々交詢社に集まつて研究討議した。其連中は中上川彦次郎、小幡篤次郎、馬場辰猪に、我輩の四人が主なるもので、此四人は今明かに記憶して居るが、後の二人 かりを一寸忘れた、一人は小泉信吉であつたかと思ふ、今一人は江木高 は無かつたかと思ふが、兎に角此連中が交詢社に集

私擬憲法

まつて『私擬憲法』と云ふ憲法草案を造つて、日夜大に討議したものである。我々が立憲制度の必要を説いたのは、すつと以前からであるが、日本で憲法と名のつく條項草案を細かに書いたものは、恐らく此『私擬憲法』が其嚆矢であらうと思ふ。交詢社は矢張り今の所（京橋南鋼町時事新報裏）で、却々熱心に研究したもので、馬場辰猪等は却々の論客だし、盛んに論難討議した。

皆慶應義塾関係の連中だし、場所は交詢社だし『私擬憲法』だのを造つたもんだから、彼此混淆して、大隈さんや我々が、立憲制度を公然唱導して居るに拘はらず、福澤先生の入智恵で、陰謀をやつてるなどとの訛傳ともなり、誤解ともなつたかも知れぬ。我々が極端な急進的な態度を取つたやうに傳へられて居るのも、一つは此『私擬憲法』を造つて討議したこと杯が、因をなしたではないかとも思はれる。其處へ例の北海

訛傳と誤解

十四年政變の真相

政變の大なる獲物

道開拓使の問題が起つた。其の攻撃運動が起つて、我々の親しい慶應出の友人が大分加はつたと云ふので、あれもこれも一緒にされて了つた。

伊藤さんと大隈さんと、勢力争ひをした杯と云ふ者もあるが、大隈さんや我々の心事は前にも述べた通りであり、又伊藤さん個人は、決して國事を私するやうな人ではない。此點だけは我輩は明言し得る。國事に對しては公平であつた、だから伊藤さんはいつも得意の手段なる、喧嘩兩成敗と云ふ策を主張して一方大隈さんにも退いて貰ひ、一方開拓使の方も相當の處分をした。よく考へて見ると、偶然とは云ひながら、此時の政變で我々も間接に獲物をする、伊藤さんも井上さんも直接に獲物があつたのである。

一一、政變の大なる獲物

— 立憲創始の近因 —

十四年の異動を以て、世に謂ふが如く政變と云ふならば、此政變こそは、我々に取つては實に莫大な物獲であつた。即ち大隈さん初め我々がズツト政府を退くト、タ、ンに、愈々嚮後十年を以て、立憲制度を布くと云ふ聖勅が出たのである。我々の引退が日本に於ける立憲政治成立の、最も大なる近因をなしたのである。私共政治に手傳さること前後約二十年、若し其間何等か國家に貢献する所ありとせば、これ位大なる獲物は無かつたと思ふ。所謂行きがけの駄賃に、ドエライ事を爲したのである、我々が引退する騒ぎが無かつたなら、恐らく、我國にいつ立憲制度が立つか、其時期さへ定まらなかつたのであらう。

伊藤、井上と云ふ政府部内の所謂文治派にとつては殊に幸ひであつた別に誰々と云ふ程も無いが、政府部内には、所謂武斷派保守派と稱すべき、一つの固まりがあつて、文治派が、自分等の思ふやうに行かなかつ

政變の大なる獲物

政變の大なる獲物

兜

た、それが十四年の政變で天下は騒然となる、それ見ろ早く立憲制を布かなければと云つて、武斷派を抑へつける口實となり、十年後には日本は立憲政治となるのに、こんな状態ではと云ふて、これ亦た保守派を抑へつけるのに、いゝ口實となつた。誠に此政變は、文治派が武斷派保守派の勢力を殺ぐためにも、大なる獲物であつたのである。

然らば伊藤、井上等は、大隈さん等と同じでありながら、何故大隈さんを援けなかつたか、福澤先生をして『政治家の交はりの淡泊なるには驚いた』と、嘆せらるゝやうな態度をとつたが、これは維新頃からの政情を考へて見れば解ることである。

維新前から日本の政治家には二つの潮流があつた、一つは歐羅巴流政治家で、一つは東洋流政治家である。而して東洋政治家は、何處までも破壊に長じては居るが建設的ではない。歐羅巴流政治家の方は何處までも

建設的である。一朝事ある際には、東洋政治家得意の壇場であるが、平常の場合には、ドウしても建設的な歐羅巴流政治家の力に俟たなければならぬ、何を何れとも云ふことは出来ない、事に依り場合に依つて何れも必要である。殊に明治維新の大改革は、一つの偉大なる破壊であつた、七百年來の武家政治封建制度を、一朝にして破壊して了ひ、あらゆる階級制度を打破して四民平等となつたと云ふ、實に大なる破壊的事業であつた、此大なる破壊的事業の遂行に當つては、東洋流政治家の努力亦た大いに與つて力があつたに相違ない、然るに一朝維新の大業成り、これよりあらゆる進歩的な建設的な施設に當らなければならぬと云ふには、ドウしても時勢は歐羅巴流政治家の力に俟たなければならぬ、此二つの潮流は一進一退して、暗遷移の裡に、矢張り此頃まで續いて來て居るのである。

政變の大なる獲物

兜

一一、聖勅奏請の動機

|| 我等の進退去就より ||

尙ほ更に重ねて繰り返して云ふが、明治十四年の政變ほど、我々に取つて大なる獲物は無かつたのである。大隈さん初め我々の一派が、朝に在つて、立憲制度を主張したから退けられたとすれば、而して在朝者は何事もしなかつたとすれば、在朝者は立憲制度の反對者として、立憲制度の實施を妨害するものと見られる、在朝者が斯くの如き態度を執れば自然天下の人心彼等より離れ背くは明白である。

此の人心民望を繋がんとなれば、政府も亦た立憲制度を起すに意ありとのことを、天下に示さなければならぬ。是に於てか在朝者は、我々一派を退けると同時に、二十三年には國會を開くとの聖勅を奏請したので

ある。即ち我々を退くと引き替へに、これを奏請した譯である。

故に此時即ち明治十四年に、陛下(先帝)の聖勅が降つて、愈々我國に立憲制度が樹つと定まり、十ヶ年後に國會を開くと定まつたのは、畢竟我々の進退が此の大事を湧出せしめたと見ても差支へ無いと思ふ。是れ即ち所謂間接の大なる獲物で、我々は朝を退いたが、それが動機となつて間接にはかゝる大なる獲物を得たのである。

我々一派が、退かすして朝に在つたならば、無論此の立憲の制度を樹てしめたであらう、然し一方退いたが爲めにも、亦た、此の制度の成立が定まつた。これを思へば我々の進退去就は、何れにしても斯くの如く我國の立憲制度と離る可らざる因縁を有して居る。偶然であり、間接ではあるが、然し事の起るや、必ず由つて来る原因がある。而して我々は朝に在つて立憲制度の樹立を唱道したが、未だ其實現を見ざる裡に退く

の止む無きに至つた。而も其事が端無くも、在朝者をして俄に聖勅の奏請を仰がしめ、我國立憲制度の樹立を決定せしめたことは、其因果關係誠に不思議と云へば不思議である。

若し明治十四年の國會開設の聖勅が、我國の歴史上に一新紀元を畫する大事件なりとすれば、其出現に至大の動機を與へたる我々一派の進退は亦間接に至大の獲物を得た譯で、今にして思へば決して徒爾とは爲らなかつた。我々此國に生を享けて今日迄、其間何等か國家に貢献したることがあるとするならば、蓋しこれより大なるものは無かつたやうである。

伊藤さ など所謂文派の人などは、決して立憲制度に反對し、大隈さんを援けないと云ふ譯ではなかつたのであるが、當時伊藤さん等の地位境遇は、敢 れをなしたならば、大隈さんを救ふ所ではない。自分が

歴史上の
新紀元の一

自分が危く
なる

頗る危くなると云ふ、四圍の事情もあつたのである。

三三 進歩派と保守派

——維新前からの二潮流——

維新前から日本の政治家中には、二つの潮流があつたと云つたが、元はと云へば、どれもこれも、何れかと云へば東洋流政治家であつたのである。所が開國となり維新と進むに伴れて、次第に進歩主義の、所謂歐羅巴流政治家とか、洋式政治家とか云ふべきものが、若手の間に漸々輩出して來た。其當時までの事實を観るに、一口に分ける譯には行かないけれども、概して軍事に關係した者は東洋流政治家であり、軍事に關係の薄かつた者が洋式政治家となつただから、世の中ではこれを武斷派とか文治派とか云ふ、思想とか主義とか云ふもの、上から云へば、保守派

元は皆東洋
流政治家

武斷派と文
治派

進歩派と保守派

進歩派と保守派

とか進歩派とか云ふべきものである。

其洋式政治家連の若手と云ふべきものは、伊藤、大隈、井上と云ふべき所で、木戸、大久保は其先輩で、此洋式政治家連に近きものである。軍事と云へば薩長が概してこれに衝つて居た關係上東洋流政治家も大分ある。薩摩の西郷は其頭目で、長州では山縣だの山田(顯義)だのが居た佐賀は概して洋式政治家型だが、江藤、副島は東洋流政治家の氣風をも加味した所がある。土佐では板垣、これは我輩もよく知つて居る人であるが、此人は大分型が違ふ、元は軍人出身で東洋流であるべきだが、所が全然さうでも無い、と云つて所謂洋式政治家でも無い、政治家と云ふよりは、寧ろ哲學者と云つたやうな風の人であつた、だから武人出身であり、征韓論の時などは、西郷、江藤、副島等と云ふ、東洋流の豪傑連と行動を共にして居たが、全然東洋流の武斷派では無くて、自由民權

と云ふやうな、一種の哲學的旗幟を樹つるに至つたのである。後藤は何かと云へば東洋流だが、純粹の東洋流ではなく、東洋流七分洋式三分と云ふやうな型である。長州の山縣は、出身から云へば、東洋流の保守派ではあるが、此人は歐羅巴式の所も進歩主義も早分りのする人で、所謂君子の貌變が出来た人であつた。何でも陸奥宗光が、例の十年の事件で長く牢に入つて居つて後に出た時に、山縣に逢つて其の西洋式に豹變して居るのを見て、意外に驚いたと語つたことがある。

そこで維新の大業と云ふ破壊事業には、東洋流政治家が大いに役に立ち、功績もあつたが、次第に秩序が立つて建設的施設になつて來ると、進歩主義の政治家が必要となり、保守派は次第に凋落して來た。事變ある毎に不思議に東洋流政治家が退いて居る、而して江藤は佐賀の亂で斃れる。十年には西郷が歿するで、東洋流政治家即ち保守派の勢力は次第

進歩派と保守派

根強い情力

進歩派と保守派
に衰へた。一方洋式政治家の方では、木戸逝き、大久保は暗殺さるで、政府では大隈さんが首席と云ふことになつた。所で此十四年の政變頃には、右云ふ如く表面に於ては、保守派の勢力は大分凋落したやうにあつたが、どうして其實力は、依然今までの情力で根強く根を張つて居た、進歩派は根が空いて居たから、表面に似ず、其實力の弱い所があつた。其當時西郷(從道)は、薩摩出身ではあるが、却々融通の利く如才無い方で、兩派に融通が利いたが長州の山田(顯義)は純粹の保守派で、山縣や西郷(從道)の如く豹變の融通は無かつた、山田は若くして驍名を走せた男である、騎兵隊一方の將として、幕府の長州征討の際にも、藝州口で幕府の軍勢を撃破して、長州には二十歳の大將が居ると謳はれた位な傑物で、今でも生きて居たら、恐らく山縣に劣らざる勢力を持つて居たであらう。

生きて居たら山縣以上

伊藤の境遇

これが政府部内の保守派の間を奔走して大隈さんを政府から撃退する急先鋒であつた。四圍の状況斯くの如き有様だから、伊藤等は、大隈さんを援ける所では無い、危ふくすると自分達が捲き添へを食はなければならぬほどであつた。

一四 我等の抱いた立憲制

— 多數黨の監視機關 —

或る著書に、當時大隈さんから岩倉さんに差出したと云ふ、立憲制度樹立の意見書なるものが載つて居た。それを讀んで見ると、多分福澤先生の書いたものであらうとしてあるが、これは福澤先生の文章ではない我輩が書いたものゝやうである。

其中に書いてあることで思ひ出したが、當時大隈さんや我々の考へた

我等の抱いた立憲政制

吾

我輩の政制

立憲樹立の意見書

我等の抱いた立憲政制

元

案の中には、政黨政治即ち議會に於ける多數黨が、内閣を組織すると云ふ方法を探つてあつた。而して官吏はこれを政黨官と非政黨官とに分ける。政黨官の方は、參議各省卿輔等であるが、當時は首席參議が今の總理大臣と云ふ所で、參議各省卿即ち大臣は無論皆政黨官で、其他勅委任及び判任官等の事務官は皆非政黨永久官とし、次官は政黨官非政黨官即ち政務官と事務官とを置くことと云ふにしてあつた。この理想は最近の大隈内閣の時に實現した譯で、參政官と云ふのがそれである。今でも勅參と云ふやうなものを置いて居るやうだが、これで議會の多數黨が常に内閣を組織することにした。警察官、司法官、地方官（本文には軍官、警視官、法官とある）は非政黨官とすることにした。これ等は大抵は英國の例に依つたものであるが、當時英國にも何處にも無い、一種の日本獨特の制度を考へて居た。

それは三大臣の制度である。當時の内閣は參議各省卿の上に太政大臣右大臣、左大臣と云ふものがあつた。其頃太政大臣は三條さんで、右大臣は岩倉さん、左大臣は有栖川宮であつた。所で此三大臣は全く内閣の上に立ち、政黨内閣とは何の關係もなき別物の非政黨官として飽くまでも嚴正中立で、政黨には何等關係を有せしめない。だから如何に政黨の盛衰に依つて内閣が更迭しても、此太政大臣、右大臣、左大臣は云ふ三大臣が政府の屋體骨と爲りて、更に動かないのである。

この三大臣が内閣の上に在つて天皇に直屬し、内閣を監視するのである、即ち地方官が選舉の時に一黨に依估ひいきをするとか、又は警察官が一黨の爲に働くと云ふ様な事をさせぬ様に、大局を監視する役目である。政黨が我儘をせぬ様に取締る事もできるのである。政黨の争ひを公平ならしむるのである。政黨をして、政府の官吏を私黨に引入れしむ

我等の抱いた立憲政制

元

特殊な皇室

有栖川宮と三條岩倉

元老の容喙

多数黨の横暴を防ぐ

此事遂に實現せず

我等の抱いた立憲政制

否

る如き弊を防ぐの道具となるのである。これは英國にも何處にも無い例で、殊に日本の如うな、特殊な皇室を戴いて居る國に於ては、皇室と人民との關係を密接ならしむる上より云ふも必要なことで、又日本のやうな國に在つては、歐羅巴邊にあるやうな君主の專横と云ふこともないから其方の心配もない。この天皇直屬の三大臣の機關が内閣の上に立つて、政黨内閣が不幸にして不檢束に流れ、動ともすれば横暴に傾くと云ふやうなことがあるやうにでもなれば、此三大臣がこれを抑制するのである。當時の事實に於ても三條さん、有栖川宮様、岩倉さんと云ふ人々でこれをなせば、政黨内閣の横暴を抑へ得ることは出来たのである。

この制度は實現しなかつたが、今日では所謂元老等と云ふ者が居て、不規則に非公式に、矢張り政治に容喙して居る。而も其弊は世上の非難を招いて居る有様であるが、こんな有様になるのである位ならば、寧ろ

不規則な非公式な元老等と云ふもの、私な容喙を許さずして、正式な規則的な此三大臣のやうな機關を設けて、内閣を監視するやうにした方がよかつたかも知れぬ。今日世上の非難となつて居る多数黨の横暴だとかあるは司法官が政黨の力に左右されるとか、又は警察官が政黨の手先になるとか云ふが如きことは、此天皇直屬の監視機關が内閣の上に在つたならば、容易に出来ないであらうと思はれる。我輩は今日の政治の有様を見、此事を想ひ起して非常に興趣深きことに思ふ。

此の用心深き仕組も大隈一派が野に下つてからは、其まゝとなり、遂に實現しなかつたのは、今日に於て名残り惜しひ心持がする。

我等の抱いた立憲政制

否

一五、立憲創始の三首功者

——板垣—大隈—伊藤——

真相誤まり
傳へらる

今明治十四年の政變の話しを了らんとするに當つて、最後に一言致したいと思ふのは今まで世間に現はれて居る、此の政變の所謂真相なるものが餘りに事實を誤り傳へられて居ることである。伊藤さんと大隈さんとが勢力争ひをしたとか、立憲の首功者たらんと競争したとか云ふ者もあるが、これは少し間違つて居るやうである。無論何方も人間だから其間多少はさう見えるやうなことがあつたかも知れぬが、決してそれが全部の原因ではない、此間本稿で大隈さんも話して居られたが、我輩もさう思ふ、伊藤さんと云ふ人は決して國事を私すると云ふやうなことはない人であつた。木戸、大久保の歿後は順序上勢ひ大隈さんが首席

大隈さんが
首席参議

大隈の勢力

と云ふこととなり、而も根の空いた所謂根抵の無い大隈さんの勢力が次第に増大して來たので、伊藤さんの部下等に快からず思つた者が少しは出て來たであらうが、これを以て必ずしも伊藤對大隈の個人的勢力争ひとか、首功争ひと見ることは出來ない。

そこで我輩は今靜かに我國に於ける立憲制度樹立の歴史を顧みて公平に評して見たい。其今日までの經過運用の善悪是非はこゝに論ずるを止めるが、私共が最も公平に最も冷靜に考へて、我國立憲の直接主因は、素より明治大帝陛下の大御心より發せることは論なきことであるが、これを民間の人士に觀る時、先づ其功勞者としても云ふべきものは、三派に分つことが出来る。

明治大帝の
大御心

其第一は、何と云つても板垣さん一派の、自由民權の聲より發したる國會開設の運動である。然しながら如何に此一派の志士達が野に在つて

立憲創始の三首功者

立憲創始の三首功名

叫んだ所で、政府がこれを容れて實行しなければ、其理想を實現するこ
とは出来ない、當時の政府は前にも云ふが如く、保守派の根強い根が張
つて、到底此急激な進歩的施設を行ふべくもない形勢の裡に在つて、在
朝者中敢然としてこれが急を唱道したのは、大隈さん及び其一派の人々
であつた。遂に其議は容れられずして、殆んど謀叛人扱ひにされて、大
隈さん等は朝を退かざる可らざるの止む無きに至つた、これを以て觀れ
ば、これ亦た如何に大隈さん等が朝に在つて其急を説いても、容れられ
ずして野に下つたまゝでは、其實現は難かしい、所が此大隈さん等の去
就が動機となつて、伊藤さん等は俄かに聖勅を仰いで十年後には立憲制
を布くと云ふことになつた、十年と云ふ年月の長短とか、急進漸進の可
否は別問題として、これがため伊藤さん等は銳意憲法起草に着手して遂
に帝國憲法を成したので、此三つの勢力が、日本の今日の憲法を生むに

至つたるには、ドウしても没することの出来ない偉大なる力であつたと
云ふことを信じて疑はない。若し日本に立憲創始の首功者を求むるなら
ば、我輩はそれは此三者に三分して可なりと思ふものである。
我輩は唯事實を事實として、我輩の信ずる所我輩の知る所をこゝに述
べたまでである。

一五、十四年政變と福澤諭吉

福澤翁の記實から

本稿は目下明治十四年の政變顛末より、立憲制度創始のことに及んだ
が、これに就ては其當時に在つて、頗る牽強附會の説を立て、福澤諭吉
が大隈派の參謀で陰謀を企てた等とまで囃し立てたことに就ては今日ま
での本稿に於て可成り其事情を詳かにしたが、それに就て福澤氏は自著

大笑な珍事

「福翁自傳」中に次の如く記して居る。

『……明治十四年の頃日本の政治社會に大騷動が起つて、私の身にも大笑ひな珍事が出来ました、明治十三年の冬の時の執政大隈、伊藤、井上の三人から私方に何か申して參つて或る處に面會して見ると、何か公報のやうな官報のやうな新聞紙を起すから、私に擔任して呉れろと云ふ一向趣意が分らぬから先づ御免と申して去ると、其後度々人の往復を重ねて話が濃くなりとうとう仕舞に政府はいよいよ國會を開く積りで、其用意の爲めに新聞紙も起すのであると秘密を明したから、是は近頃面白い話だソんな事なら考へ直して新聞紙も引受けやうと、凡そ約束は出来たが、マダ何時からと云ふ期日は定まらずに其まゝに年も明けて、明治十四年となり、十四年も春去秋來、頓と埒の明かぬ様子なれども、此方も左まで急ぐ事でないから、打遣つて置く中に、何か政府中に議論が生

國會を開く用意

三人の不和

其後には福澤が居る

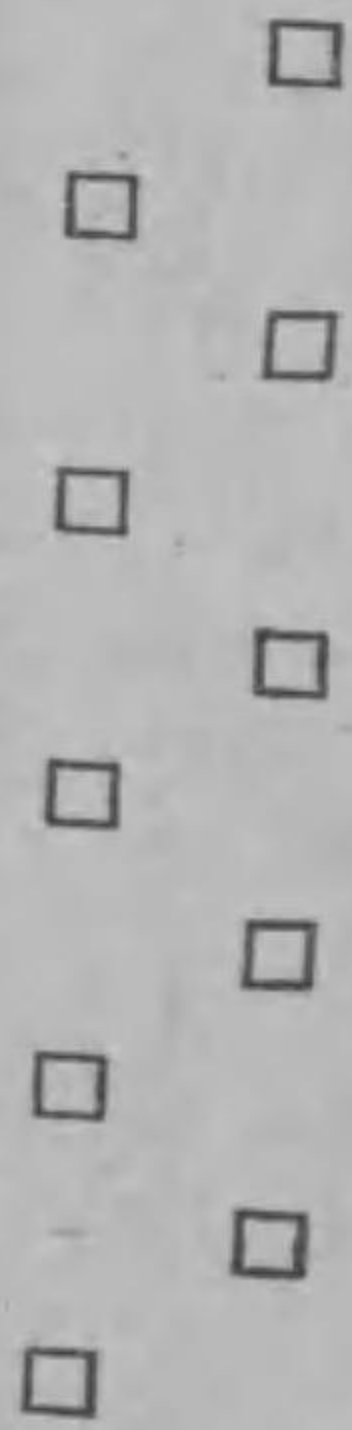
じたと見え、以前至極同主義でありし隈伊井の三人が漸く不和になつて其果は大隈が辭職することになりました。さて大隈の辭職は左まで驚くに足らず、大臣の進退は毎度珍しくもない事であるが、此辭職の一條が福澤にまで影響して來たのが大笑ひだ。當時の政府の騒ぎは中々一通りでない、政府が動けば政界の小輩も皆動揺して、隨て又種々様々の風聞を製造する者も多い、其風聞の一二を申せば全體、大隈と云ふは專横な男で、様々な事を企てる。其後には福澤が居て謀主になつて、其上に三菱の岩崎彌太郎が金主になつて、既に三十萬圓の大金を出したさうだ、なんて馬鹿な茶番狂言の筋書見たやうな事を觸廻はして、ソレから大隈の辭職と共に政府の大方針が定まり、國會開設は明治廿三年を豫約して色々の改革を施す……云々とあり、次に「當時の政變は、政府人の發狂とでも云やうな有様で、私は其後岩倉から度々呼びに來てソツと

裏の茶室のやうな處で面會、主人公は何かエライ心配な様子で、此度の一件は政府中實に容易ならぬ動搖である、西南戦争の時にも随分苦勞したが、今度の始末はソレよりも六かしいなかと話すのを聞けば、餘程騒いだものと察しられる……とあれば當時の政變が決して單純な勢力争ひとか首功争ひでなかつたことは察せられると思ふ。

又次の一節中に『十四年の眞面目な事實は、私が詳に記して家に藏めてあるけれども、今更人の忌がる事を公にするでもなし、黙つて居ますが、其とき私は寺島と極く懇意だから、何も彼も話して聞かせて、ドウダイ僕が今口まめに饒舌で廻ると政府の中に随分困る奴が出来ると云ふと、寺島も始めて聞いて驚き、成程さうだ政治上の魂膽は随分穢いものとは云ひながら、是れはアンマリ酷い、少し振くつて遣つても宜いぢやないかと、と勧めるやうな風であつたけれども、私は夫れ程に思

はぬ、御同前に年はモウ四十以上ではないか、先づ無益な殺生は罷めにしやうと云つて笑つて別れたことがある……云々、此福翁の記實を讀んで、過日來の矢野氏の談話と對照すると頗る面白い、思ひ出したるまゝに、こゝにこれを挿んで讀者諸君の参考までに供する。

(此章編者附記)



本稿を報知新聞紙上に連載中は各地の讀者諸賢から、種々懇切なる教導補正を仰いだことは編者の深く感謝に堪えない所である。今其書簡ばかりを取り出して見ても數百通に達して居る。本書編纂に際して多大の参考となつたことは云ふ迄も無い。唯編者の迂愚而も勿忙の間、江湖の期待に反する多きやを憾み、こゝに一言を挿む。

(編者挿記)

本稿編述中に大隈老侯はよく次のやうなことを語つて居られた。曰く
 「ドウも生きて居る人々のことが出て來るので一寸閉口する。ソウ小
 ツビドクこぎ卸す譯に行かぬからナ、正直に話さなければいけないし
 正直に言へば迷惑する人もあるかなナ、マア其處はい、加減な所でナ
 ……………」と。これを以つて見れば、本稿中の人事に亘ることは、侯
 が大分遠慮されて居られることが解る。又曰く
 「實際、今まで出て居る明治史と云ふものは、政治でも經濟でも財政
 でも、皆自分どものいゝやうな勝手な熱ばかり吹いて居る、少し素つ
 破抜いてやると面白いんだがマア御互命のある内は、罪なことは止そ
 うかな」云々（編者挿記）

十四年政變の後

一、立憲創始と改進黨成立

三團體と新聞の分野

さて今まで話した通りに、明治十四年の秋の末に政變があつて、大隈
 さん初め我々が政府を退いて、愈々十年後には憲法施行と云ふ聖勅が降
 つて、愈々我國にも、立憲制度が樹立さるゝと云ふことになつたが、十
 ケ年も経過する中に、民間の熱心が失はれ、其隙に乗じて、有名無實の
 憲法が造らるゝと云ふやうなことが起りはしないか歐羅巴邊にもあつた
 例であるが、これを口實に何とか理窟を附けて、又憲法の發布を延期さ
 るゝやうなことがあつてはならぬ。だから此間何とかして、斯う云ふ口

立憲樹立の
 聖勅
 有名無實の
 憲法では

實を政府者に與へないやうに、充分の警戒と緊張味とを失はないやうに絶えず氣を配らなければならぬと考へた。

又幸ひにして、愈々立憲制度が實現さるゝと云ふことになれば、どうしても議會に於て、過半数を制しなければならぬ、そこで愈々明治十五年に改進黨の成立を見るに至つたのである。

大隈さんを總理として、副總理格には河野敏鎌、これに續いて前島密、北島治房と云ふ面々、河野敏鎌は矢張り維新の志士で、土佐の生れ、維新の際には、勤王の大義を唱へて幕府に捕へられ、獄に投せられたが、死を決して獄中で食斷をし、命旦夕に瀕せんとする時、形勢が變轉して助かつたと云ふ經歷もあり、此頃の元老院議官で、元老院を切つて廻したと云ふ利権者である。前島密は大久保内務卿の下に、内務大輔を勤めこれ亦殆ど内務卿に代つて一切を切つて廻したと云ふ男、北島治房も勤

改進黨の成立

獄中で斷食

沼間守一の
嚶鳴社

小野梓の大
學組

東洋議政會

王の志士で却々の傑物であつた。

これに、加へて若手の方はと見ると、これ亦沼間守一の嚶鳴社の一派である。島田三郎始め、大岡育造、肥塚龍、角田眞平、高梨哲四郎と云ふ連中に、小野梓の率ゐる高田早苗、天野爲之、砂川雄峻、山田一郎、市島謙吉、山田喜之助、岡田兼吉と云ふ、これは大學出の秀才揃ひで、學校を起そうと云ふ連中、此二團體の外に慶應義塾出の一團で、これは東洋議政會と云ふて、我輩が一番年長と云ふので先づ兄分格、これは一つ主義宣傳の機關に新聞を手に入れ、且つ多数の若手を養ふべき本營が無ければならぬと、大隈さんと相談して、報知新聞を買ひ取り、藤田茂吉、犬養毅、尾崎行雄、箕浦勝人、加藤政之助を始めとして、文學では森田思軒、年少の若手で吉田憲六、小栗貞雄、井上寛一、枝元長辰、坂本盛徳等で、當時皆報知新聞に據つて居た。是れが則ち、我々若手の小梁山

立憲創始と改進黨成立

吉

立憲創始と改進黨成立

泊である、報知社組と云ふべきもの、新聞とは云ふもの、收支計算はそつちのけで、演説會や討論會に狂奔して、あき手の者が書く位だが、論説は多少見るべきものがあつたらうが、雑報などの不備なることは、今から考へれば汗の出る程であつた、マア報知社は一個の梁山泊のやうなものであつた。尾崎は案外精勤で、よく社説を書いて居たが、犬養は怠ける方で、催促しなければ書かなかつた。加藤は最初大阪の新聞に主筆となり、箕浦も一寸地方に行つて居つたと思ふ。又我々が報知新聞を買はぬ前に、原敬は社に居たのであるが、我々が買取つてから、一月も経たぬ内に辭し去つたのである。原は其時既に官僚の一二の頭株に知人が出來て、頻りに往來して居たから、逆も我々と艱難を與にすべき經歷でない。然るを無理に勤めて留まらせるのは、双方の爲めに宜くないと我輩は考へたから、去留を自然に任せたのである。之れは當然の處置で

社を去ると、原は果して官僚系の新聞に入つたのである。

そこで當時都下の言論機關はと云ふと報知、日々、朝野等が其頃の所謂大新聞、其内の報知は無論我々の牙城であり、朝野には成島柳北が蟻居して、これも我々と同主義で、唯日々が一つ政府御用であつた。其他に沼間守一の一派が東京横濱毎日新聞を持つて、之れ亦た却々の勢力を有し、又桑名藩士で維新の際朝敵と云はれた中村武雄(後岡本と改む)が曙新聞の主筆をして居た。

又其頃變な名だが、小新聞と稱へた通俗新聞振假名新聞では、其雄なるものが讀賣新聞、これには子安峻、加藤九郎、加藤瓢乎等が居つた。これも我々と同じで、繪入新聞には前田健次郎が——これも此方と同主義——又確か浮世新聞と云つたと思ふが、これには矢張り此方と同主義の寺家村逸雅ありて、先づ新聞も大半此方の味方である。

立憲創始と改進黨成立

自由改進黨の合同ならば
これより少し前に板垣さんの自由黨が生れたが、自由黨は世間から少し過激だ急進だと云はれて居た際として、これに加はることを躊躇して居た、所謂着實改進黨の徒は皆な改進黨に來り投じ、縣會議員とか地方の名ある人とか智識階級とか云ふ具合に、天下翕然として此傘下に集まつたのである。

此時、此旺んなる勢ひの下に、圖らざりき、我々には千歳拭ふ可らざる一大違算をなしつゝあつたのである。そは次に語らう。

二 自由改進黨の合同成らば

——此一事は終世の恨事——

我々が改進黨を組織するや、天下翕然としてこれに響應したが、端無くもこゝに、我々は禍根を今日に貽すにも至つたる一大違算を爲した。

今にしてこれを思へば誠に遺憾千萬であるが、其事情を話せばかうである。

其當時民間に在つては板垣さんの自由黨あり、最も急進的な一團として相當の勢力があり、これと並んで我々の改進黨があつた。此有力なる二つの黨派が、相結んで一團となり、政府の牙城に突撃したならば、天下の事甚た爲し易かつたであらう、最う自由黨と、改進黨とが相結んで一團となつて政府に當つたならば、必ず後年憲政の運用を完全ならしめたに相違無いと思ふが、此事遂に成らざりしは返へすくも遺憾であり何と云つても此一事は、我々の一大違算であり終世の恨事である。

當時政府側に取つては自由黨と改進黨とが、合同又は、提携することになると、それは政府に取つて誠に一大事である、だから政府では極力兩黨の相近ぶかざるやう、双方の間を離間することに力を努めた。此事

自由改進黨の合同ならば

板垣大隈を
訪ふ

自由改進黨の合同ならば
に就ては後に詳しく話すが、改進黨も自由黨も、政府の術中に陥つたのである。

大

これより少し曩き、板垣さんは自ら大隈さんを訪はれたことがある。これは餘り世間に現はれて居ないことであるが、大隈さん自身も我輩に其時の事を話されたことがある、板垣さんと云ふ人は、我輩よく知つて居るが、國事を憂ふことは實に大にして極めて虚心坦懐であつた。そう云ふ風であるから後年自由黨を伊藤さんに捧げた伊藤に對すると同様な心事で、此時大隈さんに、話されたのである。即ち板垣さんは自ら大隈さんを訪づれて、此際事を共にしたいと云ふ話があつたのである。大隈さんは此會談の際別に具體的な返答はせず、其厚情を謝する旨の答えを述べて別れたらしいが、この兩巨頭の提携が若し實現して居たならば、今日我が憲政の運用を完全ならしめて居たであらうに、遺憾な

若し此こと
實現せば

兩者の溝渠

がらこれを妨げる諸種の事情が蟠まつて居た。我々とてもこれが分らぬでは無かつた。是非そうしなければならぬとは思つたのであるが、理想と實際との一致は却々に難かしいことで、遂に此事が成らなかつた、と云ふのは自由黨と改進黨と云ふもの、間、或は双方の人と人との關係に於て、兩者の間には一致し難い渠溝があつたのである。

三、兩黨政府の術中に陥る

(上)

自由黨と河野、沼間等

其當時に於て、自由黨と改進黨とが、合同して藩閥政府に衝つて居たならば、最も強き力となつたであらうが、これが遂に成り立たなかつたと云ふに就ては、其間却々入り組んだる諸種の事情があつた。

先づ第一に改進黨の首領たる大隈さんは、其少し前までは政府の一員

兩黨政府の術中に陥る

完

自由黨と改
進黨

兩黨政府の術中に陥る

合

として臺閣に在り、自然自由黨の人々程最急進の議論を無責任に放言する能はざる立場に在つた。随つて常に板垣さん始め、自由黨の人々の議論なり行動なりを目して、餘りに奇矯である急激に過ぎる、我輩だつたらあゝはしなないと論じて居たので、旁其手前もあり、其他四圍の事情は直ちに自由黨とも手を握ると云ふ程俄に豹變することを許さなかつた。

次で最も大なる障害となつたのは、大隈さんに次いで改進黨中の頭目であり、有力者であつた河野敏鎌、これは前にも云ふた如く土佐の人で土佐に於ても相當有力なる人物であつた。所がこれまで明治政府に取つて一敵國をなして居たのは、板垣一派を始めとして土佐の勢力である。だから明治政府に於ては何とかして土佐の勢力を殺がう、板垣の力を奪はうと云ふことに腐心した。そこで政府は此方策を實行するの手段にと

同じ土佐に於て板垣に對抗し得る勢力家を使はんとして、之を河野敏鎌に持つて行つたのである、だからこれまでの経緯は、河野は土佐に於ける板垣の敵手で、西南の亂に、土佐で板垣の勢力を殺いだしたのは河野である。二人の間柄は先づ斯様である。随つて頗る自由黨の連中とは善くなかつたのである。

それに次いで改進黨中嚶鳴社組の牛耳たる沼間守一、これは維新後兵事顧問で土佐に行つたこともあるので、土佐の連中とは各方面とも知り合ひになつたが、就中、河野と非常に善くて、後沼間が洋行した時などは政府の世話で行つたので、其肝煎りは河野敏鎌であつた位、此三角關係から云へば、矢張り板垣と自由黨には喜ばれない、又大學組の牛耳たる小野梓は、土佐ではあるが板垣一派とは又違つた別派で、斯くの如く比較的有力な方面に自由黨と相善からざる分量が大分あつた。

兩黨政府の術中に陥る

二

兩黨政府の術中に陥る
事情斯くの如くんば、兩黨の合同團結は極めて至難の事に屬する、然し合體が出来ないとすれば、提携聯盟でもすれば良かったのであるが、これも遂に出来なかつたと云ふのは、此形勢を見て取つたる政府側では、全力を擧げて兩者の間を割くべく、凡ゆる反問苦肉の策を廻らした。自由黨の方でも我々の方でも、今より思へば、全く政府の魔手たる、其術中に陥つて了つたのである。

(下)

|| 政府の手は自由黨に ||

斯かる形勢を見て取つたる在朝者に於ては、出来るだけ此渠溝を利用して、さなくとも相善からざる兩者の間を、反目乖離せしむるに全力を擧げて腐心した。兩者が合一することは、時の政府に取つては、容易な

らざる一大事である。だから在朝者側では、何でもかでも兩黨を反目せしめ、喧嘩せしむればいいと、所謂毒を以て毒を制するの方針に出で、反問苦肉以て兩者を噛み合はすべく、全ゆる方策を廻らした。當時改進黨側で、比較的板垣さんとも自由黨の連中とも餘り悪くなかつたのは我々の一派である。而して我々には、此危険が刻々迫り来りつゝあることがよく判つた。こりやこうして放つて置いたなら大變だ、何とかしなければならぬと思つたが、モウ手が着けられぬ。危ない〜と思ひつゝも次第に深みへ深みへと落ち込んだ。獨り政治上の事とのみ云はず、人事凡てこれは危ない〜と氣が付いた時はモウ遅いのである。断崖絶壁の上の細道にかゝつて、アア危ないと叫んだ時は、モウ一足は迂り込んだ時で、如何ともし得ることの出来ない時である。當時我々には此危ない情勢はよく見えて居たのである。が

兩黨政府の術中に陥る

三菱攻撃

自由黨の古澤滋

兩黨政府の術中に陥る

危ない／＼と思ひつゝ、トウ／＼術中の深みへ陥つて了つた。

政府側が種々取つたる苦肉策の中で、一番目に立つたものは、我々と三菱との關係に就てある。在朝者側では、當時三菱を以て我々の金庫と信じ先づ金庫を潰して了へと云ふ譯で、自由黨に手を廻して極力三菱攻撃を始めしめた。當時政府に通じて、専ら其衝に當つたる者は、自由黨の古澤滋であると云ふ風評が立つた。私は其眞偽は知るべくも無いが、後古澤は、井上(馨)の下として朝に入り、相當に用ひられた所を見ると、或はさうであつたかと思はれぬでも無い。

一體當時、三菱が我々の金庫のやうに云ひ囃されたが、我々は少しも三菱の御蔭は蒙つて居りはしない。第一當時我々の政治運動には、今日の如く多額の運動費を要すると云ふ譯では無し、其時は未だ選挙と云ふものも無し、今日の如くに、馬鹿な費用がかつたものでは無い。而も

政府の策戦
效を奏す

黨員は大概地方の中産階級以上の人々だから、そんなに金の要ると云ふことは無かつたのである。

然し在朝黨側では全力を擧げて此作戦に志し、可成り功を奏して、自由黨の連中は次第にこれで以て我々に刃を向けて來た。遂には農商務大臣の品川彌二郎等は、自ら共同運輸會社と云ふ、半官半民の廻漕會社を設立して、三菱に對抗することを始めた位であつた。三菱だつて一商事會社として時の権力者たる政府に睨まれてまで、我々を援けるなどのことは出来はしない。それは後に三菱が共同運輸會社と合した一今の郵船會社—ことでも分るではないか。

私輩には此情勢はよく分つた。これは危ない、兩黨相闘ぐは政府の術中に陥るもの、何とかして喧嘩を避けたいと思つて居る間に、我々も其術中に陥つたが、自由黨側は、より以上に陥り込んで、トウトウ『偽黨

兩黨政府の術中に陥る

喧嘩を避け
たい

兩黨政府の術中に陥る
撲滅』等と唱へて、改進黨攻撃を始め、改進黨を偽黨と稱して攻撃の火の手を揚げた。改進黨が偽黨であつたかドウかは、其後今日までの歴史を見れば分るが、兎に角斯の如くにして兩黨は遂に取り返しの付かぬ術中に陥つた、これに就ては私の遭遇した次の挿話が當時の模様をよく物語つて居る。

(下)

——村上左一郎の述懐——

我輩は在朝黨の手に乗らずして自由黨との喧嘩を避け度い、のみならず、出来るなら進んで、兩黨の間に諒解を得せしめ度いと、實は考へて居た折から、明治十六年頃だつたと思ふ（編者附記、記録には同年三月二十九日より三十一日までの出来事とあり）尾崎行雄君等二三人で、東

海道を遊説に出た時、名古屋に行つたら、自由黨の内藤魯一君等五六人から面會を申し込んで來た。逢つて見ると三菱の功過を論じて貰ひたい君方は何故三菱を攻撃しないかとの事で喧嘩腰に見えたが、私は「ハハア、モウこゝまで政府の手が廻つて來たな」と考へたから、體面を損せぬ限り、穩かに答へて置いたから、彼等も其儘に引き取つた。後に至つて知つたことであるが、モウ此頃東京では自由黨の機關の自由新聞が、既に盛んに改進黨攻撃を始め居たので、名古屋の連中も、中央の本部に對し、手柄だてに我々に逢ひに來たことが知れた。處が喧嘩にもならず手持ち不沙汰と見え、矢野等が辟易したとか戦慄したとか功名顔に報告したものらしい、我々は實際三菱から何のお蔭も蒙つて居ないから、三菱の功過を論ずる位は何とも思つては居ない。平氣であつた。然し唯内心に在朝黨の手が良く廻つて來たと感付いて、此點に就い

兩黨府の術中に陥る

後を退ふて
村上左一郎

心肝を披
して語る洋

兩黨府の術中に陥る

てのみ大いに不快を感じたのであつた。然し此時我輩の應接振で、我輩の心事を推知し得た者も有つたと見えて、我々が名古屋を發ち、岐阜に赴く途中を、後から窃に追つ駈けて來た人があつた。それは名古屋での面會の時に内藤魯一の次に坐つて居た人で、村上左一郎と云つたやうに覺えて居る。愛知の自由黨の有力者の一人。我々に後から追付いて來た此人が我輩に向つて曰ふには「貴下の御深意は私にはトクと覺り得ました、兩黨相闘ぐは此上も無い人民の大不利で、私もドウかして政府の策にかゝらせんやうにと工夫しますが、何分目下は同志の興奮が強くて自分一人の力では逆も手が着けられず、唯獨り長嘆して居るばかりであります。何卒貴下は御立腹なく、嚮後も兩黨の融解に盡力あるやうに願ひます」とて、心肝を披瀝して將來の國事などを語つて別れたが、其時の話しに、此人も内藤も共に舊田原藩で、同藩は維新の戦時には、元と東

死生の間に
出入

在朝黨の術
中に陥る

北に在つて、二三萬石の小藩でありながら、當時の死傷者が三百人を越えた位で、大抵の者は皆死生の間に出入したから、人氣は一體に振つて居るさうで、其後此藩は三河に移されて來たので、愛知縣の自由黨では自然此藩の人々が其心核となつて居るとの話であつた。

偕て我々の一行が、岐阜から伊勢畿内を遊説して歸京して見ると、最早や自由黨は盛んに改進黨攻撃の火の手を擧げて居る。却々手の下しやうも無いと云ふ有様で、形勢はモウ如何ともすることは出來ない。已む無く我輩も、これに應戦すると云ふ次第で、遂に在朝黨の術中に陥つた姿となつて來た。

四、兩黨軋轢の一大誘因

——板垣、後藤の洋行——

板垣は洋行

此兩黨の軋轢は、モウ手が着けられぬやうになつたが、兩黨をして斯程までに軋轢せしめた今一つの不利は、板垣さんの洋行であつた、板垣さんが日本に居つたなら、未だ斯程までに兩黨の反目は見なかつたかも知れぬが、板垣さんは洋行されて日本に居なかつたのである。

これより先き伊藤(博文)さんは、憲法取調べの爲めに、歐羅巴に行つて居たが、これと相前後して板垣、後藤(象二郎)の洋行問題と云ふことが起つた。板垣さんはあゝ云ふ風の人だから旅費等は萬事後藤任せにして居つたのであらうが、後藤の方にどんな事情があつたか知れぬが、其洋行費の出所に就て、大分喧しい問題が持ち上つた。政府筋から其金が出

洋行費の出所

大石馬場等の脱黨

て居ると云ふので世間で大分非難攻撃の火の手が揚つた。其爲めに大石正己、馬場辰猪等は憤慨して自由黨を脱黨すると云ふ騒ぎ、而も板垣、後藤等遂に洋行して其後は古澤(滋)等が萬事采配を振つた位だから、自由改進兩黨の軋轢は益々激しくなつた。

板垣さんは何でも旅行先きで大分不自由されたと云ふことである。出發前に攻撃もあつたので出所の怪しい金も受けずに、自分の手一杯で萬事済まされたから始終困られたらしい、見るに見兼ねて伊藤さんも何とか援助しやうと云はれた位であつて、伊藤さん隨行の若手の役人等も板垣さんの困難されたことを話して氣の毒がつて居た。

此洋行費の出所が政府側であつたかどうかは解らぬが、其頃は獨り板垣さんのみでは無い大隈さんにも此手が廻つて來たことがある、それは佐野常民さんが或る時私に對して一寸相談したいことがあるから來て呉

大隈にも洋行を

れとのことであつたので、私は何事であらうかと思ふて行つて見ると『伊藤さんも歐羅巴に行かれて居ることでもあるし、大隈さんも洋行されてはどうか一つ君から勧めて見て呉れないか……金の所はどうにでも心配するから……夫婦伴れと云ふことになる」と大變だから一人で行くやうにナ……』と云ふことであつた。

佐野常民の
老婆心
鍋島さんな
格別

佐野さんは、極めて親切な老婆心の強い人であつたから、或はホンの親切氣で勧められたことであつたかも知れぬが當時佐野さんは在朝者には極めて受けの好い人で、且つ矢張り政府の何かをして居つたと思ふ。だから政府の手と見られぬことも無い、殊に金のことは何とか心配するからと云つても、佐野さんがそう金持では無し、大隈さんに對しては、鍋島さん(舊藩主)から援助さるゝのなら格別、ソレナラ大隈さんは極く親しい仲である、若し鍋島さんで無いと云ふことになる、ドウしても

府の命では
承知せぬ

政府の金と見るより外に仕方は無い、これはとても大隈さんが背かれる譯は無いから、私は『それはお廢しなさい、到底駄目ですよ』と云つて別れ、其問題はそのままとなつたことがある。

千歳の恨事

斯くの如く兩黨は政府の術中に陥つた形となり、軋轢次第に加はつた所へ、板垣、後藤の洋行、大石、馬場等は脱黨、古澤等が留守居となつたので、殊に軋轢の度を加へたが、これは誠に千歳の恨事で、若し此時兩黨が握手して政府に當つて居たなら、其後の我國の立憲政治は今少し何とか進んで居つて、今日よりはモ少し完全な運用を見て居たであらうと思はれる。

■板垣伯の洋行 板垣、後藤の洋行は明治十五年十一月十一日出帆同十七年六月十九日歸朝
伊藤博文は十五年三月十四日横濱解纜十六年八月四日歸朝

五、政黨の變遷と其今昔

— 願れば感慨に堪へず —

明治十五六年の頃、我々が初めて政黨を組織した時の政黨運動と云ふものは、今日とは餘程趣を異にして居つた。實に面白くもあり樂でもあつた、それに其集團は極めて綺麗で、淡泊であつた。集まる所の者は所謂有志家のみで、自分を犠牲とする覺悟を以て來集したものだ。それも其筈で、其時の政黨には何の所得もないから夫の利益の獲得を唯一の目的として入黨する者は、幾んど無かつたのである。これは獨り我黨派のみならず、自由黨も亦た然りで、多少過激な傾きはあつたが、其念とする所は、只一意國家人民のためと云ふことのみであつたと云つてよい我輩政界を退いて既に三十年、今日では何等政黨に因縁を有せず政界

十五六年頃の政黨氣質

政界を退いて三十年

公に殉ずる

利益中心の政黨

の事情に甚だ開いが、併し一個の門外漢として遠くから之れを望んだ時に、其處に今昔大いなる差異が存するやうである。或は新聞雜誌を通じ或はこれを人より聞いて、靜かに今日の政黨を見る時は誠に今昔の感に堪へざるものがある、往時の政黨の人々は私利私慾が何等眼中に無く、自己を犠牲にしても公に殉ずるを念として居たが、今日は全く之と反對で、利益を以て集まるのだと云ふことである。

聞くが如くんば、今日の我が政界では某の政黨に入れば、ヤレ鐵道を敷いて呉れるとか、港灣を何とかして呉れるとか河川を何とかして呉れるとか云ふやうに地方問題を好餌として、政黨の擴張を圖ることさへあると云ふ。

集まる人も、政黨に入れば何か利益がありはしないかと云ふ、利益を中心集る者が多數だと云ふことだが、若し之を事實とすれば政黨の黨

政黨の變遷と其今昔

六

政黨の純潔

政黨の變遷と其今昔
首たる者が其黨を純潔に保たんとするには、さぞかし骨が折れる事であらうと思ふ。我々の時は率ゐる者も率ゐらるゝ者も、政黨にこんな心配は皆無であつたのである、其譯は第一政黨に入つたからとて、鐵道も、河川も、道路も、會社設立も、未だ政黨の力で左右する事は出来なかつたから、入黨したとて、何の御蔭も蒙れない、又第二に政黨には金も要せなかつた、地方で政黨の領袖でも聘んで來て演說會を開く費用だつて、今日の様に馬鹿々々しく掛つたものでは無い。

心配の種は政府の犬

其頃の我々の唯一つの心配——心配と云ふ程でも無いが——は、黨中に探偵が入り込んで居ないか、則ち政府の犬が入つては居ないかと云ふことぐらゐであつた。政黨に入つて利益を得やう等と思ふても、議會が開かれるのは十ヶ年先きと云ふ譯であるから氣の長い話した、算盤高い連中は之に這入りはしない。だから損をする覺悟の者でなければ入黨

傳統的精神

少數が孤立は寧ろ當然

せぬ筈である。

考へて見ると今とは實に大なる變轉である。さう云ふ昔の精神を今に到るまで傳統して居る人々が何程ある、政友會中になつて舊自由黨から此精神で鍛へ上げた人が今どれ程あるか、又犬養・尾崎・島田・河野と其の頃の連中が居るが、これ等の人々の精神は矢張り、此公に殉ずるの精神が存して居る、所謂其頃の政黨流義が残つて居る、だから今日の如く利を以て集る人々の多きに對して其流義で行つては、加入者があらう道理は無い、常に少數であり孤立するのは寧ろ當然である。

六、政黨の今昔と政治教育

——國民教育の方針錯誤——

(上)

政黨の今昔と政治教育

政黨は算盤
には合はぬ

官尊民卑

此意氣と此
精神

政黨の今昔と政治教育

前章に於て述べたやうに、當時の政黨者は何等私利私益を目的としなかつた、當時は入黨しても今日の如く何等の利權も攫み得られぬ、何等の役徳も無かつたから、算盤玉の高い連中は入て來る者は無い。そのみならず當時政黨に加入すると云ふことは、實に大なる損であり割の悪いことであつた、それはどう云ふ譯かと云ふと、政黨にでも加はるならば直ぐ政府即ち地方ならば縣知事あたりから睨まれる、總てに邪魔をされる、其頃は未だ今日以上に官尊民卑の思想の激しい時とて、地方などで縣廳其他の役人から睨まれると云ふことは誠に大損のことで、何れにするも割の悪いことであつた。

然しながら、當時の政黨者は皆此苦痛と打撃とに打克つて闘つたのである、少くとも此意氣と精神とが連綿として、今日の政黨者氣質の上に流れ續いて居たならば、今日の憲政の運用、即ち政黨政治の妙機が今少

政治教育を
怠る

國民教育の
一大缺陷

しく完全に行はれたらうにと思はれる。

此點に就ては、誠に遺憾の極みであるが、又翻つて靜かに當時のこ
とを顧みるに、我々自身に、頗る怠りが有つたと云ふことを思はずには居
られない、平たく云へば其意氣と精神とに於ては、純真であり眞面目で
あつたが、其實際運動に於て、聊か手落の點があつた、夫は我々は立憲
制度創始に就ては極力之を勉めたが、憾むらくは、これと同時に最も
缺く可らざる喫緊の事柄に就て怠つた、則ち立憲制度の樹立に必要缺く
可らざる國民の政治教育を忽せにした事である、當時の日本は遺憾なが
ら、此國民の政治教育と云ふことに就て少しも考へなかつた、政府の方
ても立憲制度は布くことに定つたら、夫れと同時に併せて國民の政治教
育と云ふことに力を致さなければならぬことは當然のことであるが、政
府はこれに就て少しも考慮しなかつた。文部省は此點に就いて、少しも

政黨の今昔と政治教育

國民に教ふる所が無かつた、これは獨り其當時ばかりでは無い、今日尙ほ依然として然りではあるまいか、其讀本等は内容精神に於ては立憲制度創始以前のそれと何等變りは無、否或る意味に於て維新前と同じだと云つてもいゝ位では有るまいか。折角立憲制度は出来ても、國民の心持が、立憲的でなければ、所謂佛を作つて魂を入れぬと同様ではあるまいか。

(下)

——日本人と立憲思想——

文部省が一向に立憲制度創始に對する國民の立憲的教育に力を致さなかつたのみならず、我々政黨もこれをなすことを怠つた、我々が立憲制度其もの、成立と云ふことにのみ、極力意を注いで來たので、當面

のことはかりに氣を奪はれて、今少し深刻に今少し永遠に互つてのことを考察し探究することがお留守になつたのである。

苟も、立憲政治を布かんとする以上は、其國民に向つて充分なる政治教育を施し、立憲的訓練を與へなければならぬことは當然である。立憲的訓練とは何ぞやと云はゞ、云ふまでもなく國民の各個が、自分自身の事は自分自身で始末を爲すと云ふ心持にならせるとことである、西洋で立憲制がよく行はれる國人は皆自分自身で自分自身の面倒を見る心持があるからである。

併しながら東洋殊に支那に於ては、何でもかでも名君賢相を恃む氣風で一般民衆が自分自身に自分自身を治めると云ふ思想は皆無と云つてもいゝ位に稀薄であつた、日本も維新前の教育は専ら支那思想即ち孔孟の教へに據つたので、其政治思想は矢張り名君賢相流であつた。

然らば、元來が日本人は支那人と同様に名君賢相にのみ據る思想の持主で、自分自身に自ら始末すると云ふ思想を持たぬものかと云ふと、決してさうでは無い。日本人には、此自分を自分で治めると云ふ思想が其素質の中に存在して居つたと云ふことを認められる理由がある。

種々なる理窟は別として、先づ其一例を挙げると、昔から日本には百姓一揆と云ふものがあつた、此の百姓一揆なるものを見ると、必ず定つた様に、一揆が提出する二三ヶ條の請願がある、其主なるものは税金を低くすると云ふ事、即ち減税である、而して次には多く「名主入札のこと」と云ふ一條がある。此名主入札のこと、云ふのは、名主を入札で定める事、即ち今日の言葉で云へば投票で村長を選挙すると云ふ村長公選論である。之に依て觀るも斯く無學文盲とも云ふべき百姓の間にさへ支那流の入り込まぬ處には自治の思想が潜在して居た事は明かだ、日本人の天然の智力

發露の間に、此意識は在つたと云ふことを證據立て、居るものである。

日本人の意識が、天然に流露する無學文盲者の間にはこれを認むることが出来ても、孔孟の教へとか何とか支那の學問をした者等は、名君賢相政治の思想に支配されて、日本人自然の意識を失つて了つたのである。だから寧ろ無學文盲の百姓の間には、却つて自治の思想があつても、さて藩政等となると、藩の人々等は、當時の所謂學問があるものだから、遂に支那流の政治思想に支配されて一向に駄目となつて了つた。

日本の教育所謂學問と謂ふものはこれであつたのである。今や立憲制度を創始せんと云ふ時に當つて、此點に留意するならば、此天然の氣風を育て國民に政治教育立憲的訓練と云ふものを施さなければならなかつたのであるが、遂に此事を怠つた爲め今日尙ほ其禍根を我憲政の上に殘存して拭ふ可くもあらぬが如きは、誠に遺憾千萬である。

七 經國美談の著作と洋行

— 民心作興に政治小説 —

古來大いなる變革に際して、其變革に手傳はる人々、志士とか運動者とか云ふべき人々は、常に一つの典型的人物の行藏を、我れと我が胸に書いて、これ等の人物の動靜を模倣して自己の理想郷とし、此理想に向つて自ら動くものである。例へば我が明治維新の變革の運動者等は、或は大平記などの中に現はるゝ、楠氏の忠誠とか兒島高德の孤忠を讀んで自ら血を湧かし肉を躍らして、我れも亦た斯くあらんと期し、其他頼山陽の日本外史等が、これ等の人々の精神に同様の影響を與へ、延いて改革の萌芽を植る付けたことは、争ふ可らざる事實である。平たく云へば皆夫々生きたお手本があるのである。然るに今や立憲制度が布かれる

典型的人物の行藏

生きた手本

民衆の琴線に觸れん

政治小説經國美談

と云ふ時に際した、此立憲政治と云ふことに關しては、古往今來日本には未だ嘗て、人心の模範とするに足るべき史實も無ければ其實例も無い日本には勿論支那にも無い。これは一つ何か容易く人民の琴線に觸れ得る理窟バラない何物かを作らなければならぬと考へた。

其所で私は色々考へて見たが、これはどうしても、矢張り事實を基礎としたものでなければ不可ぬ、八犬傳の如うな全然架空的のものでも困ると思つた末が、私は事實を希臘に取つて、事實を主として、半ば小説風に脚色した政治小説を作つた、これが『經國美談』である（編者附記、明治十六年一月十二日、當時日本橋區藥研堀に在りし報知社より發行す）

今から考へて見ると、誠に粗雑な幼稚千萬なものであるが、當時は兎に角コンナ者は珍らしかつたので、これが非常に世間から讀まれて、本

經國美談の著作と洋行

洋行三年

の賣行きも良く、意外にも大分金が儲かつたのである。そこで我輩は日本が立憲國となる前に是非先進國である歐羅巴立憲國の實情を親しく見聞し研究しなければならぬと考へ、其金で洋行したのである。丁度三年程向ふに居つて、明治十九年に歸つて來たので、此三年間と云ふものは全然日本に居なかつて、日本の事には觸れて居ないので、其三年の間に起つた事柄に就てはこゝに我輩から語るべき限りでは無い、餘り大した變化も無かつたやうで、我々の仲間では、唯犬養がこれより少し先きに報知新聞を去つて、秋田に改進黨の機關として生れたる秋田魁新聞に主筆として聘せられて行つたが（附記、明治十六年四月のこと）其後東京に歸つて朝野新聞に入つて居た。其他我輩の留守中の事に就ては、我輩はこゝには一切觸れぬこととする。

犬養は秋田魁新聞へ

さて明治十九年に、我輩は洋行から歸つた、歸つて來て早速着手した

報知の改革

のが報知新聞の改革である、彼地を視察した結果、我輩は先づ日本の新聞紙も今までのやうなことでは不可ぬ、大いに改良しなければならぬと考へた。事實大いに改良の餘地も存して居た、今までの新聞と云ふものは新聞とは名のみで、まるで氣まぐれ同様に、隨時隨感の勝手な論文ばかり書いて居たのである、これはどうしても少し普遍的なものに、もう少し調子を和らげたものにならなければならぬと考へた。

八 報知社の改革と新なる筆陣

——豪傑先生の社會記者——

私は三年間の洋行の結果として、ドウしても新聞を改良しなければならぬと考へた。それまでの報知社の組織は、上局と編輯局とに分れ、上局には論說記者とでも云ふか論說書きが居つて、一方は今で云ふ編輯だ

上局と下局

報知社の改革と新なる筆陣

が、何がさて其頃は無暗に上局の人が多くて、我輩始め誰れも彼れも論説書きばかり、それが皆政治家ばかりで、ツマリ「政治クラブ」であるこれでは不可ぬ、眞の事業組織にせねばいけぬと考へたから、我輩は歸來直ちに報知社の改革に着手した。

先づ其手始めに、新聞を今少し普遍的に民衆的にするには、ドウしても新聞を安く賣らなければならぬと思ひ、紙の大きさを今までの半分に縮小して新聞代もウンと安くした。

第一には事實を迅速精密に報道する機關の設置、第二には經營の基礎たる收支相償ふの目論見を定めることが肝要である。

それから新聞を今までより和げるためには、ドウしても組織から變更しなければならぬ、今までのやうに、論説書きばかり多くて、勝手な熱を吹いてばかり居たのでは不可ぬと、先づ論説の方は、我輩が引受ける

普遍的に民衆的に

勝手な熱で
は
いかぬ

ことにして、文學讀物や其他軟かい方は森田思軒等が擔當し、其部下にも新進の若手を入れ、抱一庵、麗水、浪六などが相次で入社したと記憶する。

箕浦加藤が
編輯擔當

従來論説ばかり書いて居た豪傑先生政治家連も、みんな編輯に廻ることにした。即ち箕浦勝人、加藤政之助と云ふ連中が雜報其他の編輯擔當で、今で云へば社會部記者長と云ふ所だナ、竹村良貞——今の帝國通信社長——上遠野富之助——今日名古屋財界の巨頭の一人——等と云ふ政治家が矢張り社會部の外廻りと云ふ所で、探訪に駆け廻つたものである。尾崎行雄君は外報と云つて翻譯やら何やを擔當するに於て、一寸豫備軍と云ふ格、犬養君は、モウ我輩の外遊中に他社に移つて居た。

營業の方に、専ら三木善八、小栗貞雄の兩人が當つた、三木君は當時或る紙店の店員で未だ年も若く、新聞原料の紙買入れに就いて、紙の見

三木善八君

本を持つて来るので、數回我輩と會見して居たが、淡路出身の青年と云ふことであつたが、我輩直ちに、其警敏と算勘周密な點を見て、これは理財に長けた男で大いに用ふべしとなし、報知社に入らしめて、小栗の相棒にした所が、果せる哉、我輩の豫期した通りの成績を擧げて報知社今日の大を成した。

尾崎君は外報と云ふので非常に閑散な身となつたが、其後犬養君の行つて居る朝野新聞に人が要ると云ふので、其方へ行くことになつた、尾崎君はあゝ云ふ活潑な男だから、後後藤(象二郎)が大同團結を造るところに赴いた。藤田茂吉は我輩の洋行中に同志の一機關である壬午銀行に専ら關係することとなり、新聞社には、遊軍、客員と云ふ位の地位であつた、此頃から藤田は次第に筆硯に遠ざかるやうになつた。

藤田筆硯に遠ざかる

此改革は今から思へば當然なさねばならぬこと、敢て不思議とする

にも足らぬが、其時は此改革が非常に當つて、新聞も非常に賣れ出して来る、餘り儲かると云ふ程でも無いけれども、マア社員に相當の給料を拂ふ位の所までには漕ぎ着けた。

村井弦齋等も一青年で、自ら文章を携へて入社を乞ふて来て入れたのである。又田川大吉郎君も風來に紹介も何もなくやつて来て我輩が入れた、後郵船會社に行つて、今は代議士の正木照藏君も編輯に居つた。

これと同時に、我輩は倫敦に於ける「ニユースエゼンシー」に倣ひ、新聞用達會社なるものを設けた、これが我邦での通信社と稱するものゝ元祖であつた。後、我輩が政界を引退する時、これを竹村良貞に引継がしたが、其時から帝國通信社と改稱したのである。

斯くして先づ我輩は報知社の改革に着手して、徐に論陣を布いて居たが、當時天下の情勢を察して、我輩密に考へた、今數年後には立憲政

村井弦齋、田川大吉郎

帝國通信社

明暗の境を越えて
治が布かれる、立憲創始の準備時代である、此際徒に輕躁に失して下手なことをやつてはならぬと考へた。だから後藤が大同團結を唱へた時にも、我々は動かなかつた。例の保安條例の騒ぎの時にも、改進黨の人は幾んどこれに加つて居なかつたのである。

■新内閣編成■ 初めて新内閣制を組織せしは明治十八年十二月二十日なり

九 明暗の境を越えて

——憲政の曙光を望まん——

さて當時の情勢如何と察すれば、在野に於ては既に自由黨は解散し、其連中が後藤を中心に、大同團結をやりかゝつて見たが、これも失敗し而も保安條例を喰つて一頓挫を來して居る、此際起つべきは唯我々の改進黨系だが、我々は大いに考へた、後藤象二郎はあゝ云ふ豪快好きな男

だから、大同團結杯と云ふ壯快な事を起すにはいゝかも知れぬが、此際冷靜に考へざるを得ぬ、政治運動に熱中するはよいが、他から軍費を仰がなければならぬやうでは、永くは續かぬ、故に自ら作り自ら給して持久力を蓄へて動かなければ不可ぬ、孔明の渭瀕の策に倣つて「屯田持久」の策を樹て、満を持して動かなかつたのである。

そこで當時は伊藤さんが内閣總理大臣で、二十三年の國會開設を前に控へて居る、下手をすると、却つて不利益な結果を醸す、これは是非政府部内に有力なる我々の同志を入れて、憲法制定の上にも我々の意見を容れさせ、内より政府者を矯めなければならぬ。それには、在朝側では伊藤さんが文治派の首領であるから、これに大隈さんを組合せ、我々の意見を行ふより外に道は無い。我々は當時大隈さんの機關であり、一番に紙數も出て勢力のあつた報知新聞に屯して居る、如何に水を向けるべ

明暗の境を越えて

きかに就て考慮したる結論がこゝに到着した。

我々はかう考へたのである、眞黒の暗夜から一躍して明赫々たる白晝が來ることは無い、ドウしてもポーツと明暗何れとも分かざる黎明があつて、始めて東天に曙光を認め得る所謂あけぼのの初めの時代が必ずあるのである、我が憲政に於ても同様で、二十三年に、一度に白晝を仰がうとするは事實上難きとである、ドウしてもこゝに、黎明の曙光期を造らねばならぬ、それには文治派を援け、大隈さんを憲法制定のことに手傳さはらせて、其準備を完くさせなければ不可ぬと考へた。

我々には此秘計があつたから、報知新聞の論調も次第に其方に向けたなるべく伊藤さんと大隈さんとを接近さすやうに伏線を布いた。攻撃の爲めの攻撃を止めて多少の好意を表した。當時伊藤さんは例の歐化主義で、保守派連中から手ヒドイ攻撃を受け、或る時などは大變な艶罪を蒙

つて、都下の新聞紙上に飛んだ浮名を誣はれたこともあつたが、此時も我々は唯事實を事實として、其妄を辯した、其時は末松謙澄が我輩の所へ禮に來た位であつた。

元々伊藤さんと大隈さんとは親友であるし、我々は斯くの如く伏線を張つたので、形勢は次第に思ふ壺に篋つて來た、何でも朝鮮の事柄と條約改正の事柄で、外務大臣の井上さんが退き、伊藤さんもドウしても退かなければならぬ羽目になつて、伊藤さんは遂に大隈さんに入閣を勧めて來た。

何でも此時は入れ入れ入らぬで長い間定まらぬ、何度も何度も伊藤、黒田、大隈と三人寄つては、入れ入れ入らぬの議論で、果しがつかずに、酒ばかり飲んで別れて居た。

愈々最後に入らうかと云ふことになつた時、政治家の出處進退は公明正

明暗の境を越えて

大でなければならぬ、確な條件を出す方がよろしいと云ふ譯で、我輩は大限さんに簡単な覺書を勧めた、それは入閣するには豫ての持論として國會開設に就いて、此方の意見を行はなければならぬと云ふので、入閣の條件として主張すべき項目を書いたのである。何でも三ヶ條あつたと記憶するが、其重要な一項は大要『憲法制度の後は議會の多數黨が内閣を組織するやうに漸次に推移せしむること』と云ふ責任内閣制のことであつたが、三人の會合の所で、大限さんが其紙片を取り出して話すと、伊藤さんが『マア、今そんなことを云ふナ、歐羅巴のやうには行かぬ、又分らず家共が三人寄つて内約した等と云ひ出すと五月蠅いし、大權干犯だとか何だとか面倒になるから、それは後廻しにして……』と云つて其紙片を大限さんの手から奪つて、ストープに投げ込んで焼いて了つた。此事は後年伊藤さんが『アノ覺書を大限に渡したのは君だらう……』

と我輩に其時の経緯を述懐されたことがあつた。斯くして遂に大限さんは外務大臣として入閣と定まり、次で薩摩の關係上、黒田が首相となり、伊藤さんは退いて樞密院議長（此時初めて樞密院を創立す）となつた。

■大隈入閣 明治二十年九月十七日井上馨外務大臣を罷め首相伊藤博文之を兼れ土方久元宮内大臣となり黒田清隆農商務大臣となり越えて二十一年二月一日大隈重信入て外務大臣となる

■樞密院議長 明治二十一年四月二十八日新に樞密院を置き同三十日伊藤博文總理大臣より轉じて樞密院議長となり農商務大臣黒田清隆代つて首相となる

一〇 余が政界引退の決意

——龍溪世を捨てたる乎——

愈々大隈さんは入閣した。無論我輩にも、政府の相當な地位を與へる

余が政界引退の決意

余が政界引退の決意

二八

から入るやうにとの懇切なる勸誘があつた、何人も入るだらうと思ふて居た。然し我輩は固辭して受けなかつた、のみならず我輩は此際に全く政界から引退しようと思つた、我輩が其決心をするに至つた動機理由は下の通りである。少し我輩個人のことゝ互るやうになるが、これも諱りに關係があるのだから、其點に就て少し述べることにする。

本來は我輩は頗る懶惰者であるのに、少年の頃から父祖の庭訓やら讀書の影響やらで、將來政治家となるべく教養されたのである。教養の力は實に恐るべきもので、本性ナマケ者である我輩をして、遂に全く政治趣味の人たらしめ、一たびは國家人民の爲めに盡さなければ、人生の一分が立たぬやうに子供の時から一途に思ひ込ませられたのである。それで此時まで世に立つた我輩の半生は、此の一念が強くて、誰からも頼まれぬせぬに、獨りで國事を憂ひ、地位や年齢以上にやきもきして、役

にも立たぬ苦心を爲し來つたのである。實際自身の本分以上に心身を苦しめた。

然るに今や一寸一段落が附いた、重荷を卸すには、之が恰好の時機だらうと云ふ考へが起つたのである。其譯は愈々大隈さんは入閣して、其志を行ひ得ることゝなり、従つて今まで行動を共にした政友諸氏も、政府と相携へて志を伸べ得るの順境に入つた、又我輩の最も責任の重い報知新聞は、引續き隆運で、其賣高も蓋し第一位に居つた。斯く内外とも萬事順調である上は、我輩が去つたからとて何の不便も無い、又都鄙幾萬の諸政友に對しても不満を懐かしむるの恨も無い。今が退き時であると考へたからである。

又心身の静養と云ふことも、引退の主因ではあるけれども、尙ほ其他に一二の理由がある。我輩は元來が事物を深く考究するを好む性癖があ

る、國事の大概、國家の行末、社會の組織等に就て、も少し深く靜かに考へて見度いのに、何分今までのやうな繁忙では此望みは遂げられない。本來新聞の經營は、朝から晩までチツとも油斷の出來ぬ業務である上に一方には政黨の擴張と懸引きがあり、各地の地盤の爭奪やら、同志の應對會見やら、信書の往復やら、全然心を休め得る暇はサラ／＼無かつた。因つては此煩を免れて、深思靜慮の暇をも得たかつたのである、將來他日大いに世に働くべき時が來るとすれば、或は全く違つた立場に立つ事が無いとも限らぬ、其の爲めにも一旦政界から引退して、縁を切つて置いた方が善いかも知れぬ。杯とも考へたのである。

我輩はこれ等種々の理由からして——然し其主なるものは心身の靜養の爲めに——親友にも、天下にも、之を公表したのであつた。其時の新聞に——日本新聞だつたと思ふ——『世は龍溪を捨てざるに、龍溪は世

を捨てたり』と書かれたやうな次第で、實際其の文言の通り、我輩は未だ世人には捨てられなかつたのである、其頃の新聞雜報に民間大臣などの綽名まで頂戴して居たやら、多少は前途に囑望されて居た奴なのに俄かに引退と聞いて、大いに怪疑する人々も有つたやうである。然し我輩としては、我輩の諸友は得意満面の時ではあるし、此時退くので、こんな好い心持の事は我輩の生涯に稀であつた。

サアこれから、重荷が下りた、先づ呑氣に遊ばうと志して、京大阪から郷里の九州に向ひ、半年ばかりの旅程で出持けた、優游自適とは此時のことで、諸舊友に逢ふても時事を語らず、到る處で獵の慰みばかり。今までの辛勞を一掃して實に面白かつた。

一一 再び報知社に歸りて

——瓦斯と夕刊の失敗談——

好事魔多し

世の中は誠に好事魔多しとやらで、我輩は重荷を下したつもりで、心持になつて、數ヶ月間京大阪から郷里の方を優游自適して歸つて來ると、早速報知社から三木善八君なんかやつて來て「ドウしても今一度社に歸つて貰はねば困ります、貴方が辭めてから、新聞の紙數が大變に減りました……」と云ふのである。如何にも聞いて見ると尤も千萬、政界の引退は決心したのであるが、新聞の方まで一緒に辭めぬでもよかつたのである。これは少し思ひ切り過ぎたかも知れぬ。と我輩もかう考へるし、三木君なんかも、否應無しに、歸らなければ困るゝと云ふから、我輩はそんなら歸るけれども、今までの調子には行かぬ、向ふ一年間だ

向ふ一年間

再び報知社へ歸る

けと云ふことにして、それも遊軍と云ふ格で出やうと、話がかう纏まつて、私は再び報知社へ歸る事にした。

何でも其頃のことであつたと思ふ、それまでは、印刷機械は無論ロール板で、人間が手で廻して居たのである。我輩は洋行して向ふの装置も見て來たことでもあるし、コリヤ一つ瓦斯動力を用ひて、機械を動かしたらよからうと、愈々瓦斯を用ひることにした。すると三木君が「瓦斯にしたんではドウしても算盤がとれぬ、餘程經費が違ふてやり切れぬ、瓦斯を使ふなら、何とか今少し安く使へるやうにしなければ駄目です」と云ふ譯で、又人間の手で廻したことがある。

又此時分に我輩は、夕刊の發刊を思ひ立つてこれを決行した、これが日本に於ける一番最初の夕刊發行であらう、然し何事でも時機未だ到らざる時に、餘りに時勢に先んずると云ふことは一時失敗に終るものだが

瓦斯ではやり切れぬ

再び報知社に歸りて

二三

此夕刊發行の計畫と云ふものは、遂に失敗に終つて了つた。

我輩は歐羅巴を廻つて來て、これは必ずいゝだらうと思ふて、やつたのだが、未だ其頃の日本の社會には、新聞の夕刊等と云ふものは必要を感じられなかつた。今日なればモウ夕刊を見なければ何だか變だと思はれるが、其頃は未だ少しも顧みられなかつた。第一、一番に困つたのが其配達である、配達夫が朝配つて、又夕方配らねばならぬので、色々苦情は出る、諸種の困難は伴ふ、そこで残念ながら之を見合せる事にした又其頃の新聞賣捌店は頗る貧弱な者が多くて、信用して之を頼みとする譯に行かぬ、因つては本社は一切直配達と云ふことにして、澤山の本社直屬の出張店と云ふやうなものを造つた。これが今でも報知新聞獨得の組織として残つて居る、全國に支局分局出張所を澤山置いてある制度の起つた始まりである。

時機未だ到らずと、残念ながら夕刊の發行は止して了つた。然し三木君の頭には、此時の夕刊發行のことが絶えず離れなかつたと見えて、後年(明治三十九年十月)率先して夕刊の發行を決定し、而も先んじてこれに成功したものは、矢張り報知新聞であつた、思へば誠に今昔の感に堪へぬ次第である。

話しは餘談に互つたやうであるが、かうして私は再び報知社にだけ遊軍として歸つて居る間に、又々我輩政界のことに手傳さはらねばならぬことが起つて來た。

一一 我々同志の順境時代

|| 初めて加藤高明を知る ||

さて其頃前後の事情を顧みると、實に其時は我々の同志政友が或る意

我々同志の順境時代

二三

味に於ける順境の時代の一とも云ふべく、得意の境遇に在つた時とも云へる。

一切の政務は大隈

大隈さんは外務大臣として入閣し、黒田さんが總理大臣で、名目は黒田内閣であつたが、黒田と云ふ人は薩摩人で極めて質實の人、武人の出で、軍人志士肌とでも云ふか、政治家では無く、政務を見ると云ふ風の人では無かつた。それで一切の政務は無論大隈さんが執るので、政務上の實権は大隈さんに在つて、而して一方文治派の代表としては、伊藤さんが樞密院議長として、閣外遊軍の格でこれを援けて居る、改進黨の副總理格であつた河野敏鎌も、樞密院に居るので、實に此時こそは、我々の同志が先づ得意の時とも云へる。

條約改正

所で其頃まで歴代の内閣が最も苦心した問題は、治外法權の撤廢に關する條約改正問題であつて、此問題は歴代内閣の暗礁とも云ふべく、井

井上の失敗

上さんが外務大臣を辭したのも、此條約改正に對しての攻撃がヒドかつた爲めである、無論大隈さんの入閣は、憲法制定の事に手傳さばると云ふことも主要であつたに違ひないが、當面の政務事務に關する案件は、云ふまでも無く此條約改正の解決である。

其以前の井上さんは條約改正に關し、外國との交渉を開くに當つて、各國を一團として向ふに廻はし、一緒に交渉したから、相手は聯合して強くて困り、これが爲め失敗したのである、そこで大隈さんは、今度は一國づゝ國別の交渉を始めた。各條約國の公使等と別々の談判にした、これは前よりは餘程事を有利に導いたのである。

加藤高明の活躍

此時加藤高明君が大隈外務大臣の秘書官であつたが、加藤君は内外共に却々に働いた。加藤君は英語は非常に達者なものだから、直接に大隈さんの通譯もすれば、大隈さんの使者として、方々への交渉にも當つた

當時のことに就ては加藤君に聞けば一番よく解らうと思ふ。

我輩は加藤君を以前から知つて居た。それは我輩が洋行した時、倫敦で始めて加藤君と知り合になつたが、其時は未だ三菱の愛婿では無くて三菱の一平社員として、事務見習ひのために倫敦に行つて居たのである。我輩は其時から非凡な男だと思つた、さうして我輩が向ふの新聞記者だとか名士だとか云ふ人々を訪問する時などは、加藤君が大概共に行つて呉れて、通譯をしてくれたものである。斯くして我輩は彼方で加藤君と懇意となつて、其人物の却々凡ならざるを見抜いて居た。

だから加藤君が大隈さんの秘書官になつたのは、犬養君や尾崎君のやうに我輩の橋渡しと云ふ譯では無かつたが、大隈さんから加藤高明を秘書官にすると云ふ話を聞いた時に、それは至極結構であると、加藤君を大いに推賞し賛成したものである。

人物非凡

大に推賞す

■尾去澤事件 ■ 事件審理中明治六年征韓論で江藤(司法卿)は西郷等と野に下り事件は行儀となり其儘日を過し翌七年四月には江藤は佐賀の變で死刑となり同年十二月判決があり井上は懲役二年の處酌量減刑して罰金四十圓に處せられた。濫澤榮一北代正臣川村選小野義真夫々處分されて落着

(下)

|| 初めて豫算を公布す ||

井上は官を辭したが、こゝに井上の一つの過誤は、井上は餘に四面楚歌に陥つた腹立ち紛れに『日新真事誌』と云ふ外人——ブラツクとか云つたと思ふ——經營の新聞に、財政上の數字を並べて、金が不足だから應ずることが出来ないと云ふ自己の不滿を公にした。これが又一般から國家の秘密を公にしたと云ふのでヒドク糺彈された。これは井上自身が興奮の餘りに書いたのか、又は濫澤か誰かの筆であつたかも知れぬが、計數も大分間違つて居たが、我輩は代つて財政當局の地位に在るので、仕

井上の過誤

財政統一難と豫算の濫觴

方無い、其計数の誤れる點を指摘して辯駁を試みた。これと同時に我輩は國家の歳入出は須らくこれを公開すべしとなして、こゝに初めて豫算と名づけ、會計年度を定めて公布すると云ふことゝなつた、是れ即ち今日の豫算公布の初まりである。何でも明治六年の七八月の暑い時で汗を流してやつたが、井上は概算が不足だと云ふから、我輩は餘ると云ふたんである。

當時のことを顧みるに、井上の此大困難に屈せざりしことは誠に多とすべしで、一方西郷、板垣、江藤等の攻撃も少し度に過ぎて、甚しきに至つては人身を傷つくる様のこともあつたが、餘りに攻撃が急なるために井上の興奮も度が過ぎたに相違無い。時の経過と共にこれが一つの歴史となれば、何れも其時の行懸り上度が過ぎたので、何れが何れと云ふ譯もない。

我輩は仲裁に入つた時から、豫算無しに財政をやるのが間違ひであるから、豫算を公開するは必要であると論じて居たが、計らずも井上が大藏省を去つたのが動機となつて、これが公開を見るに至つた。一般人の公平なる批評は我輩の算當を至當と見てくれたが、井上の興奮が極度に達した結果、多少自己に便宜な不確實な算當を作つてこれを發表した其事が、偶然にも却つて後のための福となつた。我輩は何時でも樂觀で、至てのこととはどうにか正當の處に落付くものと信じて居るが、此時もどうやら其通りになつたやうである。井上とも元々私怨があつた譯では無し、直ぐに理解し仲直りもして、井上の民間の事業等は出来るだけ正當の助力を與ふるやうにしたんで、後年大久保が清水谷に斃れたる時、我輩人材を想ふこと頗る急で、英國に居た井上を電報で呼び戻して内閣に列せしめるやうに取扱ふに大分骨を折つた。然し當時の井上の各方面に

於ける不人望と來たら實に其極に在つた。今淨海清盛とまで云はれて攻撃されたもので、そんな者を内閣に入れてはと云ふ反對も猛烈であつたが、我輩は木戸逝き大久保斃れたることゝて、人材を思ふの切なる餘り、井上の才幹を惜しんだが爲めである。

兎に角、斯くの如き幾波瀾を経て、財政上著名なる豫算編成の基を開いたのであるが、これが因は、今日尙ほ有志家達が叫んで居る教育費問題と、裁判獨立の問題とであつた。江藤の發案で裁判所を行政から引離して獨立さすと云ふ、内閣でも之に同意して法律に定まつたのに、金が無いから今に豊になつたらやると云ふのである。換言すれば財政が許さねば、裁判の獨立も人權の擁護も人民は得られぬ、依然蒙昧專制を續けなければならぬと云ふ譯になるのだから、井上に取つては少し不利益な、どちらかと云へば無茶な拒み方であつた。

教育費問題

人權の擁護

處士横議

過渡期の衝に井上我輩

夢の如し

これも一面から考へれば、封建の餘弊から來た感情の争ひで、不平の徒が所謂處士横議で、井上は奸物だ大隈も奸物だと云ふのが、大概西郷、板垣に訴へると云ふ、極く單純な善惡邪正から來た感情の行違ひであつた、後の大久保の變等も矢張り之である。西郷の亂の終る頃まで、此間人心の變動は實に測り知る可らざるものがあつたが、亂後人心は多少落付いた、鎌倉以來の長き封建を破壊して、僅か十幾年でこゝまで落付いたのは實に幸運であつた。此過渡期の衝に當つたのが井上と我輩とで、伊藤も居れば此渦中に捲き込まれて居たのであるが、幸か不幸か伊藤は岩倉、木戸、大久保等と海外に遊んで留守であつた、四年に東京を出發して亞米利加に向ひ、六年の九月に歸るまで前後二十三ヶ月と云ふ長い旅行で、其留守中での出來事だが、此大變亂の衝に井上と我輩とが當つたことを思へば實に夢の如き心地がする。

■財政論沸騰■ 井上達洋の財政論外人ブラックの新聞社の手に入り日新眞事誌に掲載され朝野中外の議論沸騰す是に於て参議大隈重信を大蔵省の事務總裁となし細密なる會計概算を取調ふ是れ明治六年五月九日なり

■大久保歸朝■ 大沸騰の此間同年五月二十六日特命全權副使大久保利通歐洲より歸朝す

■豫算調製嚆矢■ 明治六年六月九日大蔵省事務總裁大隈重信の下に初めて豫算表成り此を頒布す豫算調製の嚆矢なり

一九 税制整理と最初の地租改正

——其困難は想像以外——

明治政府の重大困難は、内政に外交に頗る多々あつたが、就中、外交問題は最も重きを置かれたので、明治初年に於ては外交官に頗る人材が集まつた。又變革の時何時でも苦しむのは財政問題で、随つて財政部にも多くの人材が集まつたが、肝腎の金が無いと云ふ始末で紙幣(大政官官札、民省札等)を頻りに發行して、財政状態は次第に混亂する、忽

ちにして起つた問題は税制の整理で、第一の困難は各藩の租税が夫々思ひ／＼で、偏重偏輕が甚だしい、これを整理均一することは大困難で、減せらるゝ者は何人でも歡ぶが、増さるゝ方は歡ばないのは當然である。殊に第一番に横はつた大難關は、地租改正と云ふ大問題である。所が未だ嘗て日本全國の土地を綜合して丈量したことが無い。田畑、宅地、市街宅地、郡村宅地、山林、原野或は官有地私有地と、種々なる地目に分けて、正確な丈量をした圖面帳面と云ふものが無いのである。而も地租改正と云ふことが、如何に重大なる問題であつたかと云ふことは、多少は雷同やら牽強附會があるとしても、これが當時各所に起つた一揆の最も主なる原因となつたことでも思ひやられる。

これは單に大蔵省だけでは不可ないと云ふので、大蔵内務兩省の支配とし、最初から地方官等をも集めて諮詢し、一番最初の租税局長(附記、

正式に云へば租税頭には陸奥(宗光)がなり、大久保が外遊から歸つて來てからは、自ら地租改正局總裁となり——便宜上地租改正局を獨立させた——大久保の死後は我輩が代つて出た。舊來の税より餘程減するつもりであつたが、ドウも豫期の如く行かなかつた、それでも大分減する様にはなつた。夫まで雜税一千餘種もあつたんであるから大變である、これを皆免税した、大英斷であつたが、金額はそれ程でもなかつた。地租改正が如何に困難だと云つても、國內の事であるから、何でも無い譯だが、實際上何十萬と云ふ筆數になり、甲乙の縣で不同があつたり、高低があつたりするのを、全國一律に平均するの大困難は、誠に想像するに餘りあることであつた。不平百出で、政府部内でさへも反對が起ると云ふ有様となり、木戸の如き、最初は改正論者であつたが、中途から反對論者となると云ふ譯で、内部からさへ我々のなすことに不平が起る

と云ふ状態になつたが、此困難の中に在つて、米價の高低の差の甚しいのを均一して、六年から、彼れ是れ十年以内までに、ドウにか斯うにか成し遂げたのである。國費も官費も人民の費用も大分使つたが、山林、原野、荒蕪地、河、湖水、官有地、民有地、御料地、郡村宅地、市街宅地、田畑等全國の地目分の圖面が出来、臺帳と稱ふる原簿も出来た。これは大業後の修正で、其後多少の修正はあつたことであらうが、今日では地租は國家歳入の主なものでは無い。然し國民の生活の基礎たる土地のことであるから、全然不正確では安全でないことは明白であるから、兎に角、復古後の此大業を近々十年餘りで成し遂げたるは、蓋し尋常事ではなかつたのである。

大藏省の官吏のみならず、地方官吏、郡村の官公吏又は特に御用係りを命ずる等、随分多數の人を使ひ、殊に速にしやうと云ふので、一層澤

山の人を使ふたが、其多くは矢張り大蔵省の事に属するものであつた。然し大久保は少時すると不慮の災に遭つたので、主に我輩が其局に當つたが、こ亦一方ならざる大難事であつた。

而も其間最初から大蔵省に在つて一番長くこれに關係し、一方ならざる努力をなした功勞者は松方である。松方は陸奥が程無く租税局長を罷めると、其後を襲ふて租税局長にもなつた。松方の功蹟は實に没す可らざるものがあつたのである。

續いて諸種の進歩發展があつて、今尙ほ進歩しつゝあつて止まらぬが、要するに日本の進歩の動機は外交の開かれたることである。所がこれに次いで一番苦しむのは、何時の時代にも財政である。殊に國防費等は、大困難で、國防費を最少限度に見積つても、これに應ずる金が足らぬと云ふ有様で、軍人達は頗る不満足、大切な教育等をも後廻しにして陸海

松方の功績

陸海軍先取

伴食大臣

軍が先取りする、文部省等は意の如く財政の分配に與り得ぬと云ふ状態となり、何時の頃よりか文部大臣を伴食大臣とさへ云ふに至つたのである。それは兎に角として、當時我國が外交開かれて諸外國の壓迫を受けてより、非常に開發進歩したことは事實である、漸次政治、經濟より、文學殊に純文藝、劇と云ふものが近來外國の思想の刺戟影響を受けることとは夥しい。斯くの如く明治維新の際に於ては、諸種の有形的施設が行はれたので、今や時代は五十有餘年を過ぐ、書龍點睛と云ふべき、精神的思想的建設を成し遂ぐべき、第二の維新に逢着して居りはしないかと思はれるのである。

第二の維新

■大政官札 明治元年閏四月十九日、明治十三年限りの紙幣三千二百五十萬兩の發行を布告し大政官札と云ひ同年五月二十五日より發行す

■民部省札 明治二年九月十七日民部省札二分一分二朱一朱の四種總額七百五十萬兩發行を布告す

■地租改正條例 明治六年七月二十八日詔して全國地租を改正し土地の代價に従ひ百分の三を以て地租とし其改正條例及び施行規則等を頒布す

■地租改正正 ■ 明治八年三月二十四日地租改正事務局を置き參議大久保利通を總裁とす同局は十四年六月三十日廢止さる

二〇 演劇能樂一夕話

|| ころにも官僚の力 ||

門外漢で無
風流

劇、文藝の話して思ひ出すことがある、我輩は一向に此方面には門外漢で無風流の方だが、然し明治初年の其變遷の跡を辿つて見ると、其處にも時代の影が窺はれて一寸面白い。

團十郎、菊
五郎

何でも明治十七八年だつたと思ふ、大いに演劇の改良勃興を圖らうと云ふ譯で、伊藤や井上や西園寺等が、大變に力瘤を入れて居たが、トウく先帝に井上の宅に行幸を仰いで、團十郎、菊五郎(先代)といふ名優

の芝居を御覽に入れたことがある、所が先帝は能樂は大變お好きなかやうであつたが、芝居には餘り興味をお有ちにならなかつたんで、唯夫れだけに終つて了つた。これはいくら允文允武の先帝でも、御趣味の相違だから致方も無い。

改良の發端

福地源一郎
徳富蘇峰君

明治初年から其頃へは、何でも彼でも政府萬能で、政府の力を借らなければ何事も出来なかつた。此芝居のことも大分政府者が力を入れて見たが、こればかりはさう容易く官僚型には箝まらぬと見えて、ドウも巧く行かなかつたやうである。然し當時に於て後年の劇改良の端を發したものは、何と云つても福地源一郎の出現であらう。福地は櫻痴居士と號して、政論家で文學に秀で、又一面劇作者であつた。今日で云ふならば徳富蘇峰君と云ふやうな人だが、蘇峰君の嚴格几帳面と違つて、福地は頗る風流洒落であつた。一體に文學者と云ふものは、一面から見れば

行藏不檢束とも思はるゝ位に、風流を好み、これを得意とする風があつて、これは英國邊りでもさうだが、蘇峰君は然らずして頗る造作がある。福地は時代が時代であり、大いに風流韻事を得意とし、自己に文才もあり又藝もあつたので、これを利用して劇の改良をやらうと云ふことになつて、演劇改良會等と云ふものも起る。色々一轉二轉して遂に芝居場を造ると云ふ譯で、西園寺を會長とし、井上が例の調子で無理押しに押し付けて、トウ／＼劇場まで出来ることゝなつたが、今度は家だけ出ても中味が揃はぬと不可ぬと云ふ大難關が起り、これは福地でも難かしいと云ふ譯で、早稻田へ行つて坪内を引張り出せと云ふことになつたが、坪内君にも色々異論もあり、肝腎の事業其物がドウも巧く行かぬ。宮中も、一般民衆も、餘り力を入れぬので遂に失敗に歸した。此時失敗はしたが、此劇場を建てることと云ふ計劃を立てたのが、今日の帝國劇場の

出来る基となつたのである。

其後坪内君等大分新劇運動に力を注がれたが、之れも蹉跌せられたやうである。然し之れは全然失敗と云ふに非ずして、これが萌芽となつて今尚ほ其事業はなされつゝあるのである。時代の變化と共に劇も急激の變化をなして、爾來三四十年、今日漸く眞個の變化に逢ふて、劇作も文學上新たなるものが大分現はれるやうである。然し我輩門外漢の觀察だが、此頃の作がよく時代精神に伴ふて居るや否やは、頗る疑問とせざるを得ない、唯徒に外國物の焼直しで、纖弱野卑淫猥なるものゝみが多いやうである。然しこれは獨り劇許りでは無い、何事でも過度期の現象としては避け難いことである。漸次進んでは居るが、悪くはなつてゐないと、坪内君も語つて居たやうである。

團十郎、菊五郎は實に名優であつた、舊幕時代も名優が居たが、これ

天才的名優
壯士芝居

等は概ね天才的で、我輩は芝居のこと等は餘り知らぬが、所作事とか踊りとか云ふ風の、所謂藝術は、矢張り或る點まで遺傳的で天才的のものである、然し今日の時代は唯夫れだけでも不可ぬ、大いに智識と云ふことも必要なので、此間も菊五郎の婆さんが遊びに來ての話に、此頃は舊劇役者の子が、大分學問もし勉強もして、大いに研究的に進んで居ると云ふことで、ドウも斯う云ふ天才的先天性の上に新味を加へた方が、壯士芝居等よりは、と云ふことである。今や劇方面も、他の文藝と同様、一大轉機に際會して居ると思ふのである。

久米邦武博士

能楽も却々政府で保護したもので、夫れに英照皇太后が大變お好きであつた、何でも其事業には久米(邦武博士)が岩倉から依頼を受けて色々力を盡したやうである。紅葉館に能樂堂が出来る、月一回同好の士が集まると云ふ風で、貴族の間にも、一般民間にも大いに流行して、一時衰

伊藤(述)

人間の運命

運のいゝ人

人に「あの時あなたがかう云はれましたが、覺えて御出でになりますか」と話したら「さうでしたナ」と云はれた。

丁度伊藤さんが五十歳を迎へられた春、我輩が伊藤さんを訪ねた、伊藤さんが「乃公の先輩には五十まで生きた者は無いが、乃公は長生きだ」と云はれたことがある。考へて見るとさうで、木戸さん大久保さん皆然り西郷は五十を越ゆる僅かに三、吉田松陰、高杉晋作、久坂玄瑞等、長州の先輩皆然りである。其伊藤さんがあの最期で、此大隈さんが生き残られて居られるのだから、人間の運命と云ふものは誠に測り知ることが出来ない。

大隈さんと云ふ人は實に運の善い人で、此時だつて外務省官邸の應接室で手術したので、今なら着る物も蒲團も、何から何まで一切嚴重に消毒してやるのだが、あのゴミだらけの應接室で手術したのである。そ

剛雄無言の思ひ入れ

れに微菌も入いらす、不具乍ら、あの通りの健康體になられたのである
實に運のいゝ人だと思ふ。

一七 生死の巖頭に立ちて

|| 身に寸鐵も帯びず ||

我慢強い人

脚はメチャ
メチャ

大隈さんと云ふ人は、生來我慢強いが、我輩は此時實に其最も然る所
以を痛切に感じた。一體人と云ふ者は、平生何とか彼とか云つて居つて
も、愈々死ぬるか生きるかと云ふ、切迫詰つた瀬戸際に立つと、却々さ
うは行かぬもので、人間の價値と云ふものは、此生死の巖頭に立つた時
大抵其判断がつくものであるが、此時の大隈さんは、ホントウに平生の
我慢強い人だと云ふことを裏書するに充分なるものがあつた。
兎に角脚はメチャ〜になつて居る、出血は夥しいのである。實際

神色自若

莞爾たり

痛かつたらうと思はれたが、痛いとも云はなければ、アマリ呻吟もしな
い、神色自若と云ふ形容詞を使ふ譯にも行かぬかも知れぬが、頗る落付
いたもので、出血が甚だしかつたから、血色が少しく平生より悪かつた
位のもので、他に何等の變化は無かつた。

殊に脚の切斷後は、大概のものなら元氣も大分衰へる譯だが、伊藤さ
んが來られた時も、伊藤さんはあゝ云ふ磊落な無遠慮な人だから、イキ
ナリ蒲團の端に乗りかゝつて、大隈さんの顔を覗き込まれたが、伊藤さ
んが物を言はれたら、大隈さんは莞爾として笑はれた、さうして何だか
二言三言話された(記者附記、大隈侯遺難當時伊藤公は小田原に在り、
上京し來りたるは翌々日位なりと當時の報知新聞の雜報に在り)

我輩は元來政治上のことでも何でも、愚痴は一切言はぬことにして居
たが、大隈さんも我々以上に愚痴を云はぬ人である。我々政治生涯に在

生死の巖頭に立ちて

愚痴を云はぬ人

生死の巖頭に立ちて

一頁

つた間は、却々逆境に立つたこともあるが、我輩は一切愚痴を云つたことは無い。併し大隈さんは我輩以上に、逆境失意に陥つたことも多ければ、其浮沈の程度も激しい、而も我輩は、未だ曾て大隈さんが如何なる場合と雖も、愚痴をこぼしたのを見たことが無い。此時だつて自分の身體のことも、政治上のことも、些しの愚痴も云はれなかつた我々のは修養の力であるかも知れぬが、大隈さんのは無論修養體驗もあらうが、寧ろこれは天分だと云つてもいいと思ふ。

元來大隈さんは御一新以來却々危険なことは多かつたのである、刺客などにつけ狙はれたことは幾度あつたか知れぬ、我々にしても自ら危険を感じた事もある、偶には護身の武器を持つて歩いたこともある、然るに大隈さんは危険の程度は我々以上の時でも、少しもこれを身に着けなかつた人である。徒手で平氣で歩かれた、劍などは持つても居ない人で、此點は實に不思議だと思ふて居た、死生に對してはドクして却々達觀された人である。

徒手空拳

御大典の衣冠束帯

刀なにか持たない

で、此點は實に不思議だと思ふて居た、死生に對してはドクして却々達觀された人である。

之に就いて面白い挿話がある。何でも御大典の時に大隈さんは時の總理大臣で、大隈さん始めみんな衣冠束帯で、腰に劍を釣つたものである。そこで宮内省の方から此の束帯用の劍は、みんなの所持して居る愛刀でしてやるからとのこと、みんな夫々愛刀の身を出して、夫れを束帯用の劍に作つてもらつたものである。我輩は其の話を聞いて居たから、御大典が済んで大隈さんに會つた時「あなたはどんな劍を釣られましたか」と尋ねたら、大隈さんは「ナニ、我輩は君も知つとる通り、刀なにか持たないので、愛刀なんかあらう譯は無い、だから我輩のは何でもいゝ、飾りだから綺麗なのをこしらへて置けと云つて置いた」と云はれたが、大隈さんは、前から刀なにか持たれなかつたし、護身の具を身に着け

生死の巖頭に立ちて

一頁

ることのなかつた人である。

■高木氏のこと ■高木兼寛氏が醫者の内で一番に駈付けたことに就て次の如き讀者からの投書があつた、前略(番外卅六)中に「一番に駈け付けたのが高木兼寛で大方途中から聞付けて来たものと見えた」云々の由に御座候が右は高木氏が馬車にて附近を通行せられたるを呼止めて現場に高木氏を案内したる其人は現今神戸の松方幸次郎氏の經營する美術品整理を擔當する其時内閣吏員たる深津正彌氏の由に御座候右は其當時聞込み候まゝを鳥渡申上候早々(横濱正金銀行内某)

一八 和漢の刺客に就て

—花より團子の世の中—

大隈さんの話に因みて、刺客と云ふものに就て考へて見ると面白い事がある。

刺客

刺客と云ふ言葉は、無論支那から來たので、昔から支那にも日本にも

刺客はあつた。然し支那の刺客と日本の刺客とを比較して見ると同じ東洋人でも、其間自ら、大なる相違を發し出すことが出来る。

風蕭々として

支那の刺客は、大概は他人から頼まれてやるので、自己自ら自發的にやるのでは無い。而も金を貰つてやる一種の請負仕事である。少し昔の有名なもの二三に就いて考へて見ても直ぐ分る。荆軻は「風蕭々として易水寒し、壯士一度び去つて復た還らず」など、頗る威勢はいゝが、これは燕の太子丹に頼まれたのである、即ち「大牢を供へ異物を具へ、間々車騎美女を進めて」頼まれたとある。それで秦王——後の始皇帝——を刺しに往つたのである。又專諸は「光既に專諸を得て善く之を客待す」で、公子光に頼まれて吳玉僚を刺した。

專諸

又、聶政は、陽の嚴仲子に頼まれ、韓の哀侯に奉公して、韓の宰相俠累を刺した。これも「黄金百鎰を奉じて」頼んだとある。又唐の宰相裴

黄金百鎰

和漢の刺客に就て

和漢の刺客に就て

●度を刺して、重傷を負はした賊は、師道に頼まれた。即ち「師道もとよ
り刺客姦人を養ふ」云々から「元衡を暗に射殺し、度を撃つて首を傷く」
とある。

これ等を見ると大概、頼まれたものか、然らずんば請負仕事で、養は
れた刺客連である。所が日本の刺客と云ふ者は、全然性質が違ふ。大概
は時勢に憤慨してとか、國家のためとかで、自己自ら發奮して、此舉に
出でたものである。これは支那と日本との國柄の違ふ故でもあらうが、
兎に角和漢同様の間に、多大の逕庭あるを否む譯には行かぬ。

先づ明治になつてから、十分所謂刺客と云ふべき者が出て居るが、清
水谷に大久保を斬つた島田一郎等だつて、決して金で他人から頼まれた
ものではない。森有禮を刺した西野某、岐阜に板垣を刺したる相原某、
何れも他人に頼られたのでは無く自發的である。大隈さんに爆裂弾を投

げ付けた來島恒喜だつて、無論同志と云ふ者はあつたかも知れぬが、決
して金錢物質で、他から頼まれたものではない。其見解の是非善悪は
別として、皆國家の爲め、主義の爲めの公憤である。

固より今日の時勢に於て、刺客等の行爲と云ふ者は決して獎勵すべき
ものでも無く、そんなことのあり得べき筈のものでも無い。又こゝに其
善惡論をしようと云ふのでも無い。夫れは別問題として、今日の如く、
世の中が全く物質主義に利己主義に傾いて、何でもかでも「花より團子」
と云ふ風になつて來て、政治も政黨運動も、全てが利権中心となつて來
た、主義とか國利民福等はソツチ退けて、悉く利権を獵るに汲々として
居る、政黨も先づ利権に依つて人を集め、利権に依つて黨勢擴張する
と云ふの風潮が旺んになつて來た。世の中がかう云ふ風になつて來ると
今後は——若し現はるゝとせば——刺客等も支那の如く、金で頼まれて

やるやうな連中が出て来るかも知れぬハ、——と翁は語り終つて、
皮肉に阿々と大笑した——

一九 改進黨の消長推移

——長老退き中堅を失ふ——

政黨と云ふものは、恰も富士の山の如きものである。一帯頂上が即ち首領始め最高幹部で極少数、五六合目が一寸中幹部と云ふ所じ、其人數が殖えて来る、其他の普通黨員は、裾を引いて居る最も面積の廣い所で其人數は全體の七八割を占て居る。所で此下の方に一度びグラツかれると山はどうしても崩れ傾く、政黨が一度び何事か事變に際會すると、上の方は左程に動搖はしないが、下の方は可成り激しい動搖をするもので、大概中幹部所が一二割、普通黨員となると五六割は動搖するものである。

政黨は富士の山の如し

政黨の動搖

改進黨の大
打撃

ある。

此條約改正事件の騒ぎ、大隈さんの遺言事件、是だけの大騒ぎが延いて改進黨に影響せぬ筈は無い、非常に黨勢の消長に大影響があつた。今や二十三年の國會開設は眼前に控へて居て、此大動搖は改進黨に取つては大打撃であつた。

これより少し先きのこと、或る時、伊藤さんが我輩に向つて「今選舉を行つたなら、一體改進黨は何人位を得ることが出来るだらう」と聞かれたことがある、我輩これに答へて「ソウですナ今なら乾度半數は割合ひます」と云つたら、伊藤さんは「ソウなるとホントに都合がいいがナ」と云はれたことがある。實際其頃であつたなら、或は過半數は取り得ると云ふ自信もあつた位で、黨勢も却々盛んであつたのである。然るに一度び條約改正の騒ぎがあつてから、改進黨、黨勢上には實に動搖が來て

過半數は請
合だが

改進黨の消長推移

大頓挫を來した。而もこれが二十三年の國會開設を目前に控へてのことである。

此事無かりせば、改進黨將來の黨勢は、今少し順潮であつたらうが、實に此一事は改進黨の消長に取つては、再び取り返すことの出来ない創痍であつた。否獨り改進黨の消長のみならず、此一事こそは、誠に今日までの、日本に於ける政黨の消長推移に對する、一大分岐點ともなつて居る。

此時に當つて、改進黨内部の状態はどうであるかと云ふと、黨首たる大隈さんは此始末、創立當時の長老連は、既に或は轉じ或は退きして居る、殊に最も其中堅として活動して來た所謂アクチブ・コロネル——活躍なる將校——とも云ふべき者が全く居なくなつた。即ち創立當時高田南島、天野、岡山、山田等大學組の秀才連の統領として、最も活躍した

政黨消長の
一大分岐點

アクチブ、
コロネル

小野梓逝く
沼間も逝く

る小野梓は、既に明治十九年（一月十一日）に病に斃れた。又嘸鳴社組の牛耳を取つて居た偉傑沼間守一も、これより少し後（明治二十三年五月十七日）に死んで了つた。又議政會組の兄分であつた我輩は、全く政界から隱退して、唯新聞にだけと云ふので關係したのが、止むに止まれの仕儀で飛び出した丈で、意は依然、政界の引退に在る。

斯くの如くアクチブ・コロネルと云ふべき中心人物を失つたことが、尠なからず黨の消長に影響を及ぼしたるは素よりである。後は皆同じ背丈の者が多い、かうなると勢ひ衝突やら何やら、ゴタ／＼の起るは寧ろ當然で、ヤレ犬養と喧嘩したとかどうとか云ふやうなことが絶えず起り出した。此出發點が未だに改進黨系の推移消長の上に波及して居る。これは獨り改進黨のみでは無い、自由黨も亦然りで、板垣さんが伊藤さんに、無條件で自由黨を捧げなかつたならば、恐らく同じ運命に逢遭

此出發點は
今に波及す

して居たらうと思はれる。

二〇 大隈伯の隻脚癒えて

——我輩は宮内省に入る——

此騒ぎでトウ／＼黒田内閣は退き、大隈さんも無論辭められた。さてかうなると、次は我輩自身の慶秀である。云ふまでも無く、我輩自身の底意は、一切政界から引退するに在るのだが、此際大隈さんの生死を見極めぬ間は義理にも動く譯に行かぬ。然し大隈さんは、一兩度は願ふことがあつて、大變に心配したが、あゝ云ふ幸運な人だから、傷も癒え、不具にはなられたが、丈夫になられることゝなつた。

そこで我輩は愈々決意した。新聞社の方はモウ三木(善八)君が大分慣れても來たし、却々經營の才もあるので、これは三木君に任せて我輩は

大隈さんの
生死

宮内省へ

引退しても大丈夫、所で一方政界の方はと云ふと、これはドウも興に退くことは却々難かしい、何か大事が起ると又引張り出されるにきまつて居る。因ては色々考へた揚句、一つ宮内省にでも入れて貰はう、さうすれば一旦は、すつかり縁が切れるだらうと、かう考へたから、我輩は伊藤さんの所へ頼みに行つて、其由を詳しく語つた。伊藤さんは快諾された。

我輩の生涯中で、新聞社の就職でも、仕官でも、大概は内ふから相談を受けたので、此方から頼んで行つたことはないが、前後通じて唯一圖此時ばかりは、我輩の方から頼みに行つたのである。

これで愈々我輩は、宮内省御用掛と云ふ閑職に就くことゝなつたが、御用掛と云ふホンの閑職、伊藤さんと宮内大臣——土方さん——とが相談して直ぐに決ることゝ、簡単に考へたが、伊藤さんは此我輩の宮内省仕

宮内省御用
掛の閑職

一應陛下に
奏上

先帝の信任

官のことを陛下——先帝——に奏上せられた。愈々陛下の御裁可があつて、伊藤さんから御裁可が濟んだとの話があつて、我輩は宮内省に入ることもなつた。これは我輩が、今まで政黨なんかに関係して大分暴れて来た、それを兎に角、他の所とは違つて宮内省に入れると云ふのだから伊藤さんが一應陛下に奏上されたのであらうし、無理も無いことである。後に、色々様子を見て居ると、伊藤さんは如何なる瑣事と雖も、大概の事は陛下のお耳に入れられて居られたやうである。こんな小さい事まで申上げずとよからうと、思はるゝことまで、大小と無く奏上されて居た。それで我輩の仕官のことも、陛下のお耳に入れられたのであるかも知れぬが、一つには此點が、伊藤さんが非常に先帝の御信任の厚かつた所以でもあつたかと思はれる。

兎に角、斯うして我輩は宮内省に入つたが、これには大分友人共が驚

井上毅

いた、先づ一番に最も猛烈に抗議を申込んで来た知人は、井上毅であつた。

■黒田内閣更迭■ 明治二十二年十月二十四日大隈外相を除き各大臣辭表を上る二十五日三條内府首相を兼任し内閣を組織し黒田首相を除き山縣内相西郷海相山田法相松方相大山陸相板本文相後藤選相は辭表御却下舊の如く國事に盡せと優命あり同年十二月二十四日再び更迭して山縣有朋首相となる

■大隈外相辭職■ 明治二十二年十二月十四日大隈伯傷略々癒ゆるに及んで辭表を出す

一一一 井上毅と佐々友房

——敬愛すべき反對論者——

我輩が突然宮内省に入つて了つたので、知人共が皆驚いたが、中にも井上毅は、親密な或る友人を介して「矢野は怪しからん、人を馬鹿にするにも程がある、宮内省に入るとは何事だ、モウ國事は顧みないと云

井上の抗議

井上毅と佐々友房

ふ譯か、井上がさう云つて居つたと云ふて呉れ」と云ふ譯で、本氣で怒つて來た。

大津事件

我輩はかうしてトウ／＼宮内省に入り、社會上の諸問題から遠ざかつたが、それでも却々種々の誘惑は絶えない、現に例の大津事件、即ち津田三藏が露國皇太子を斬つた時、大騒ぎで時の外務大臣が罷めた。其後任に困つた揚句榎本武揚が外務大臣になつた。此時伊藤さんは我輩に向つて「ヤウ／＼大臣だけは榎本にすることに決つたが、次官に人が無くて困つて居る、一つ君、次官をやつてくれないか」と云ふ話。そこで我輩は「それは困ります、他のことなら何でも聞きますが、これはかりは御免蒙りたい、さなくとも宮内省に入つたことですら、友人共が彼れ是れ云つて居るのに、又外務次官なんか飛出したら、大變なことになるりますから、こればかりは御免蒙りたい」と斷つたのである。

君、一つ外務次官に

井上と我輩

又宮内省に入つた最初に井上毅が怒つて來たのは、井上と我輩とは親密であつた、井上は在朝者で漸進保守主義、熊本の人で極端な國權論者我輩は之に反して進歩急進論者、政策の問題となると、白と黒程違ふのだが、ドウ云ふものか、個人としては非常に合口であつた。政策の問題には大議論をなしたものだ。仲は非常に好かつた。之れは國の成行を心配することに於て、二人とも同じ事であつたからである。

井上と云ふ人は保守派ではあつたが、非常に朝廷を思ふことの厚き人で、朝に一の失政あれば、夕べには必ず諫書を上ると云つた風で、恰も唐宋の古名臣と云ふ面影があつて、誠に敬すべき人であつた。先帝の御信任も厚かつた。此人が生きて居つたなら、今日我々の眼に觸れて居る様な、種々な政治上の失態は、或は防ぎ得たかも知れぬと思はれる。井上は在朝者だが、熊本人で今一人在野側で我輩と好かつた人があつ

朝に夕べに國を憂ふ

井上毅と佐々友房
 一六四
 た。これも保守派だが、我輩とは親しかつた、それは佐々友房である。これも保守的な國權論者で、我輩とは違つて居たが、却々政治家としても立派な男だつたし、それで單なる現實政治家でなく一つの理想をも有つて居た。チャンと保守主義で個人から家、家から國、國から世界と云ふ風に順序を立て、理想郷を描いて居た。だから我輩と互に話をしてても餘り多くを言はずとも、彼の云ふことは我輩には直ぐ判る。佐々も我輩の云ふことは直ぐに諒解するで、立場は違つて居たが、何方からも敬愛して居た。書生などによく紹介状をつけて我輩の所にも寄こして居た。却々偉い人物であつた。其門下から安達謙藏君、山田珠一君等が出たのも、蓋し當然のことである。井上の話が出たのでツイ佐々のことを思ひ出したのである。

二二二 式部官として國會に臨む

— 半世を共にした大隈侯 —

斯うして我輩は、一切の世事から遠ざかつて宮内省に入つた。さて入つては見たが、仕事は何をしていゝかと云ふことになり、其頃皇室典範は、既に出来て居たので、之れに附屬の、皇族令取調への類に従事することとなり、井上毅と股野豚と我輩とがこれに當ることとなり、我輩が専ら其主任となつた。井上は文部大臣になるまでこれに加はつて居た、股野はツイ此間亡くなつたあの男である。

所が少時経つと、ドウも何か格式位置が定らぬでは待遇上に都合が悪いと云ふので、振り付けられたのが式部官である。勅任の最高式部官で其時二人任せられたが、それは水戸の徳川篤敬さんと我輩とであつた。

式部官として國會に臨む

式部官として國會に臨む

そこで面白いのは、間もなく國會開設が愈々實現されて、日本に於ける最初の國會が召集され、陛下(先帝)が親しく臨幸されて勅語を賜はつた。其時は、我輩も式部官として、陛下に陪從し、陛下が勅語を御朗讀遊ばされる時は、チャンと威容を正して陛下の御側に侍つて居たのである。

當時の新聞の雜報などに「國會開設の最初に、龍溪が斯の如き姿を見んとは洵に天下の珍である」と云ふ意味のことを書いたが、事實それに違ひない、我輩は青年より政界に立たん、立憲制度の創始を以て終世の業と爲し、改進黨を組織しては、口に筆に政事に従ひ、止むに止まれぬ仕儀とは云ひながら、大隈さんの條約改正の際には、矢表に立つて一方の敵を引き受けた。

何人と雖も國會開設の際には、在野政客としての龍溪を、議席の一隅

に見ることを、豫想したに違ひない、それが一朝にして政界から隱遁し宮内省に入り、式部官として陛下に扈從して議會に臨んだのであるから世人が之を奇としたに不思議は無い、イヤ今にしてこれを想へば、自分ながらに、人事の變轉の頗る奇にして、測り知る可らざるを感ぜざるを得ない。

我輩は斯くして、一切政客から遠ざかつた。爾來卅餘年靜かに想ひを回らせば、往事茫茫、眞に夢の如し、而して其半世を共に政界に馳驅したる大隈侯は、今や頗る病篤し、往時を追懷すれば誠に感慨無量である。

我輩は最後に、我輩が政治に志したる動機と、大隈侯と初めて相知るに至つた時の事を追懷して、此談話を打ち切りたいと思ふ——と語り終つて翁は抑然とした。(記者附記、本項は一月七日午後、混雜中の早稻

式部官として國會に臨む

田邸の一室に、侯の病状を氣遣ひつゝ、翁の語るを記者が聽き取つたものである。

二三 初めて大隈侯と相知る

——大藏少書記官となり——

福澤先生

大隈さんと我輩との最初の關係を話し遅れたが、之れは言ふまでも無く福澤先生の紹介である。然し大隈さんと福澤先生とがドウ云ふ動機であつたか、仲好しになられたかは、我輩一切知らねば聞いた事も無い、兩氏の間柄はソウ古くは無い、多分明治七八年頃からだと思ふ（記者附記、此點に就ては既に掲載せし老侯自らの談話中にあり）

夙く板垣と相知る

所で我輩は先輩政治家としては、寧ろ大隈さんよりも、板垣さんの方が夙くから懇意であつたのである。我輩が大隈及び阿波の慶應義塾分校

報知に執筆した頃

の擔當者となつて、兩地に三四年を過し、一心不亂に勉強して歸京し、藤田茂吉が主筆我輩は遊軍記者と云ふ格で、藤田を輔けて報知新聞に筆を執つた頃、一方東京日々新聞が、政府の御用新聞として、福地源一郎がこれに居り、民間新聞としては報知新聞がこれに對峙して居て、我輩は極力立憲制度創始の急を高調したので、自然其頃自由民権民選議院設立を唱へて居た板垣さんと知るに至り、板垣さんも我々に力を添へて呉れるし、互に往復もし、我輩亦板垣さんの意見を執筆したこともある。だから板垣さんの人となりをよく知つて居る、随つて後藤象二郎とも知るに至つた。

後藤象二郎

所で其新聞記者生活は二三年を経過したが、其頃我輩は銃獵を好んで居る際で、當時行徳の鹽田が、未だ御獵場とならぬ時で、鳴が澤山居て拂曉に忍び寄れば必ず多少の獲物があつたので、一日出かけて忍び寄る

初めて大隈侯と相知る

初めて大隈侯と相知る

一七

と縁頭の雌雄二羽を見出した。そこで第一發に雄鴨を仆し、第二發で空中に飛び立つ雄鴨をバタリと撃ち落した。大いに得意満面と云ふ天狗で久しく福澤先生に無沙汰をして居るから、一つ出掛けて大いに手柄話をしやうと其雄鴨を持參して先生の宅に行くと、先生が「イヤ丁度いゝ所へ来た、實は今夜君に来て貰はうと思つて居た所だ」と云ふ。何かと思ふと「實は大隈大藏卿からの内話しがあつて、然るべき若手の人物が一人入用だから、將來有望の者を見立て、呉れとの事であるから、君がよからうと思ふて居るがドウか、一つ行かぬか」との話、我輩も行つてもいゝと思ふたが、何がさて未だ其頃は、官界の苦勞も知らねば、世態も知らぬ、齡漸く二十七歳、氣宇四海を呑み、意氣天下を席捲するの時代である、大隈が何だ大藏卿が何だと却々見幕だけは強い。奏任一等ならよし、然らずんば御免蒙ると云ふ鼻息だ、其頃奏任官は大書記官、權

三等で我慢
しろ

大書記官、少書記官、權少書記官、七等出仕の五級あつて、大概若手の振出しは、五等の七等出仕に定つて居た。それを一等の大書記官から然らずんば權大書記官、それ以下ならイヤだと云ふ譯、所が大隈さんは流石に「イヤならよせ」とも云はぬ「マア、さう云ふな、最初から一等なんか、それは無理だ。其内何とか考へるからマア中折れで、中間の三等（少書記官）で我慢しろ」と云ふ譯合、我輩は「そんなことはイヤだ」と頑張つたが、我輩の父は知事なんかをして居たので、官界の事情にも通じて居た。此父が「お前はさう單純に考へるが、官界のことはさうは行かぬ、皆鰻上りで、最初から三等になるなどは破格だから」と、家庭から大いに勧められて、愈々奏任三等で仕途に就くことゝなつたが、此時初めて大隈さんと相知つたのである。

初めて大隈侯と相知る

一七

當時會計検査局が、未だ獨立せず大藏省の中に在つた。我輩は大藏

祖父の庭訓と二人の先輩
少書記官としてこれに出たが、當時何か調査でもあつて、委員を造ることとなると、何時でも、岩崎小次郎、田尻裕次郎、平田東助と我輩と四人がいつも其委員に加はる連中で岩崎は磊落で、田尻は一種の風変わり平田は其時から勤直であつた。

斯くして兩三年を出でざるに、早く奏任の首級に累進したが、太政官内に統計院を置かるゝに當り、我輩は其幹事となり、其處に大いに若手を三四名入れやうと云ふので、慶應義塾出の秀才から、豫て目を付けて居た犬養毅、尾崎行雄、牛場卓造の三人を採用したのである。(前章参照)

二四 祖父の庭訓と二人の先輩

|| 大隈さんと福澤先生 ||

我輩はかうして半世を政治生活に送つた、初めは先生の橋渡しで、大隈さんの帷幕に参じた譯で、我輩半世の公生涯を顧る時、此の二人は終生忘る可らざる關係にあつた。福澤先生と大隈さんとがドウしてあゝ懇意になられたかは知らぬが、同氣相求むると云ふが、此二人は誠に相似相通する點が多い、唯一方は學者であり、一方は政治家であると云ふ丈で、其性格はよく似て居る、恐らく福澤先生を政治家にすれば大隈重信であり、大隈さんを學者にすれば、福澤諭吉が出来たらうと思はれる。

何方も果斷決行で思ひ付いたら、直ちに實行する、我々が六ヶ月も考へることは、二三ヶ月でパツ／＼と實行する、それが不可ぬと見れば、直ちに轉回策を講じる、議論でも、悪いと思へば遠慮なく變改するに躊躇しない、かう云ふ點は誠に兩者よく共通して居る。

世生來無精者

ブラハム、
ヨンゲ

祖父の庭訓と二人の先輩

一七

此二先輩と同時に我輩がドウしても忘る可からざる一人がある。我輩は前にも述べた如く、生來至つて無精者で、政治家等には頗る不向きなるに拘らず、何故さう云ふ方面に出たかと云ふと、庭訓とでも云ふか、祖父の感化が非常にあつたのである。善にあれ惡にあれ少年時代の訓育など、印象の深い力強いものは無いと思ふのである。

亞米利加のモルモン宗を開いたブラハム・ヨンゲのお母さんは、孟子の母の如き賢婦であつたのがヨンゲの七八歳の頃から「お前は宗教家として、世を益し、人を導くべく生れて來て居るのである。決してそれを忘れてはならぬ」と教へ込んだものである、それでヨンゲは少年時代からすつかり、自分も其のつもりで、志行與に群兒に異つて居て、遂にモルモン宗を創始した。其他、之に類する人々の例は尠くないが、我輩幼年時代の經驗から、之は決して、うそでないと感じるのである。

七星の象

宋の朱子、
隋の文仲子

我輩の祖父も亦我輩が幼少の折「お前は左の額に七つの黒子がある。これは七星の象で、經世済民の使命を受けて居るのである。必ず政治家となつて、此使命を果せよ」と教へられた。幼少の頃の庭訓の感化は恐ろしいもので、此事などは、無精者の我輩をして政治界に志さしめた原因の一と云つてもよいのである。

然し我輩は、祖父は何故七星の象ある者は、終世済民の事に當らねばならぬと云つたかゞ解らなかつたが、後に至つてハ、アそうかと思つたことは、宋の朱子は面に七星の黒子があつたとある。又大儒と稱せらるゝ隋の文仲子名は王通（太宗の名臣魏徵房玄齡等は此門下から出た）にも亦た額に七黒子があつたとある。祖父君は多分是等の例に因つて言はれた事と思はれる。

我輩の政治に志したる動機は、洵に斯の如しで、一先づ之れを以て

祖父の庭訓と二人の先輩

一七

此話しの打切りとしたいが、時恰も隈侯の危篤に際して、此項の打切りとなつたも極めて感慨深い。語れば種々と思ひ出話しもあるが、我輩は唯本欄の主題を重んじ、大隈さんを中心として、それに關聯した事柄を主として話したまでである。其以外、我輩の過ぎ來し方に就ては、何れ他日、自叙傳を書き度いと思つて居る。

矢野文雄氏は、今は全く世事より遠かつて居らるゝが、往年大隈侯の帷幕に在つて政界に雄飛し一方新聞其他に於て文名噴々『經國美談』浮城物語』新社會』等の著者として矢野龍溪の名は當時の讀書界に喧傳せられた。明治の政史思想史文界の上に其名を逸すべからざる人である、今此書を公けにするに當り、多大の勞を賜はつたることを深く感謝す

(編者附記)

『最後の筆録』を抱いて

|| 巨人『永劫の記念』 ||

此稿筆を起して茲に六閱月、此間回を重ねる百有餘、稿未だ下ならずして、遂に『永劫の記念』となつて了つた。今や巨人隈侯の靈は、悠久の天に昇つて、呼べども再び地に還らず、我れは最早や侯の口を通じてこれを紙上に傳ふるに由無く、讀者亦たこれを紙上に讀むの機は、遂に永劫の彼方に去つた。事成りしに非ず、我筆折れしに非ず、天は遂にこれを我等より奪ひ去れるなり。止んぬる哉。侯は自ら語りし六十餘回の『大隈侯昔日譚』こそは、實に此偉大なる巨人が人界に遺したる唯一の『最後の筆録』となつた。眞に是れ『最後の筆録』なり。侯が病床に瘞るゝ瞬間まで、語られ且つ編みたるは此稿にして、爾來十一旬、遂

『最後の筆録』を抱いて

「最後の筆録」を抱いて

二

に其まゝ起つ能はずして幽界の人となる。侯は素より死生に超脱す、安らかに天に昇つて些の憾み無からん、されど獨り遺されたる筆者は、此永劫の記念たる、侯が「最後の筆録」を抱いて、今更ながらに深き感慨を禁ずることが出来ぬ。初めより豫期したることでは無かつたが、此「最後の筆録」が、偶然にも、侯が生前遺されたる事業の一つであり、且つ縁由淺からざる、我が「報知新聞」紙上に印せられたることは、我等がせめてもの幸ひとする所である。侯が生前口癖の如くに云はれた「ドウせ人事は意の如く成らずだ、豫め定めた通りにはならぬもので、偶然の結果が、禍轉じて福となるのである」と云ふ言葉が、今や事實となつて偶然にも我が「報知新聞」の上に降りかゝつて來た。皇天の攝理、人事の降遭、洵に奇なりと謂つべしだが、思ひ出づれば、今はこれも哀傷の種である。

「報知新聞」と侯との關係、筆者たる自分が侯の知遇に報ゆるの言、言はんと

欲することは、眞砂の如くに盡させぬものがある。然しながらそれは一家の私事にして一個の新聞記者として、本欄を擔當したる筆者が、今茲に述べべき限りでは無い、他日又其所あるべく其時あるべしと思ふ。

又侯が生前のことども昇天の模様等、これも今茲に記すべき限りでも無い。況してや我筆にて侯の遠逝を悲しむの言辭を弄するなどは、侯の教へに負くの大なるものである。侯は一生を通じて、愚痴と云ふものを云つたことの無い人である。今更茲に悲しみの繰言を並ぶることは、眞に侯の精神に副ふ所以では無い、侯は眼に見ゆる有限の人界は去りたりと雖も、眼に見えざる無限の世界に入つて、尙ほ不斷の活動を續けるであらう。侯の昇天は實に成すべきを成して人界を凱旋しこれより悠久の精神的首途に出づる其第一程である、新しき世界への出陣である。侯は生前よく語つた「我輩は死ぬる時は必ず大往生をするのである」と、今や其言葉は事實として現れ、生きながら眠るが如きの大往生は、眞に此人界の偉傑が

「最後の筆録」を抱いて

三

「最後の筆録」を抱いて

皇天の御許に赴く第一程に適應はしい。

さりながら我れは人の子、今にして幽明界を異にするよと思へば、何となく惜別の情に堪へぬ、殊に此稿未だ半ばも成らずして、遂に候は「今に快くなつたら又やらう」と筆者は「必ず快くなられるから屹度稿は續けられる」と、双方が互に胸に描いて居た淡き頼みが、遂に眞實の空頼みと消えて了つたことは、遺された筆者に取つては誠に千歳の恨事である。花發いて風雨多しの語を、今更らしみくと感ずる。

然しこれも餘り多くを云へば候の大嫌ひな愚痴となる、私は唯此際に、巨人が「最後の筆録」を抱いて、其當時を回想し、筆者が此稿を起したる動機と、其間の経過記録を明かにすることは、候の靈に對するの禮であり、讀者に對する義務なりと信ずるが故に、少時本欄の割愛を乞ひたいと思ふ。

□
|| 松葉杖にすがつて ||

今にして思へば、此稿を起すこと假りに今三ヶ月も早かりせば、事件も年代も今少し進んで居たであらう。然しこれも今となつては詮術無い、ホンの緒論位の所で、これから本論に入り、愈々佳境に入ると云ふ所で切れて了つた。

筆者は此稿を起す數ヶ月前から、此企ては胸には秘めて居たのである。然らば何故其時決行しなかつたか、これは固より筆者の横着病が大原因をなして居るが、今一つ大なる原因は「候が承諾されるかドウか」と云ふことを久しく懸念した、筆者より先に二三同様の事を申込んだ人があつたが、皆承諾されなかつたと云ふことを聞いたからである。又日夕候に接して居た自分には、候は過去を回顧することが大嫌ひ、随つて自ら自叙傳風のものを書すと云ふやうなことを好ま

「最後の筆録」を抱いて

「最後の筆録」を抱いて

ぬ人であると言ふことも察せられた。今一つは斯くの如き業を企つると云ふことは如何にも、元氣のい、侯に對して、死後の備へでもするやうで、ドウしても直接に侯に向つて云ひ出す勇氣が出なかつたが、今は却つて此遠慮が大なる憾みの種となつた。

自分は遂に「ドウか一つ回顧談を」と云ふことは云ひ兼ねた。そこで考へた揚句が早稻田の古本屋を獵つて故圓城寺天山君が「郵便報知」に書いた「大隈伯昔日譚」を一冊探し出して來た。一日侯を訪ねて雜談の末、其書を取り出し「古本屋でこんなものを探して來ました」と、侯に出すと、侯は多少感慨に耽られた模様で、ツクツク眺めて居られたが「ウムこれは圓城寺が書いたのだ」と、圓城寺氏の人と爲りや其當時のことを話された「ドウです一つ其續きをお話しになりませぬか」と切り出したら「ウム話さう少し考へて置くから此次から……」と意外にも機嫌よく承諾された。それは早稻田邸の樹間に蟬の鳴き聲繁き、昨年七月

下旬であつた。

第一回の談話を始められたのが、忘れもせぬ、それから二三日經つての七月二十六日の午前であつた。暑い時なので奥の書院の廣間で籐椅子に倚つて相對した侯は浴衣掛の輕装で團扇を片手に語り出てられた。其時の第一言は末だに筆者の耳朶に残つて居る。あの一字の口を徐ろに開いて「古い記憶を辿つて、先きの談話に續けることも無用に非ずと思ふのである、多少の重複、反覆、前後するは免れぬと思ふが……」に始まつて、次で「明治六七年は實に我國家に取つては大不幸な年であつたのである……」と語り出された。其日の談話を終つて別れる時「今度は一つ原稿に一度目を通さう」と云はれた。

越えて七月三十日からの夕刊に連載することとなり、三十日の紙面には筆者「はいがき」を掲げて、本文は三十一日から連載した。

それから以後無精者の筆者にしては、可成り熱心に通つた。然し例の門戶開放

「最後の筆録」を抱いて

「最後の筆録」を抱いて

の千客万來で、何時も來客に二人の對談を妨げられ勝つて、却々譚材を蓄め込むことが困難であつた。併し候も却々努められた。其頃から時々微恙があつたが、病臥せられて居ても、此の談話にだけは、態々起きられて、寢巻で松葉杖を突かして書院に出で來られた。自分は此候の松葉杖姿を見る時は、何時も痛々しく感じた。聊か恐縮して早く引き揚げやうとしても、却々話しは盡きぬ「ナアに、大丈夫大したことはないんだ」と云はれる。

併し今よりこれを考へれば「若しやこれ等も、障りの一つにもなつては居なかつたらうか」と、自分は今更當の事を考へずには居られない。

最後の日、永遠の別れ

八月の下旬であつたと思ふ——今適確なる日を忘れた——候は日光に聖上の天

機を奉伺された。當日筆者も隨行した、却々元氣ではあつたが、微恙の後で、思ひなしか疲れ勝なやうに見受られた、歸られてから其後は、どうも健康思はしからず、遂に一切の訪客を避けて引籠られたが、筆者には必ず會はれて談話を續けられた。然も矢張り松葉杖で表へ出られる、——其頃は表の書齋に歸られたと記憶する——病氣は却々快くない模様になつたが、丁度九月の廿一日の午後、御病氣に障られてはと、傍の人々が心配されるに拘はらず、約束がしてあるからと無理に出られて、華盛頓大學の野球選手連を、早大の選手と共に迎へられ、好きな演説こそされなかつたが、庭に下りて寫眞を撮られ、簡単な挨拶と述べられ、例に依つて選手連を對手に笑ひ興せられた。

其翌日朝鮮人某が訪れると、これも約束がしてあるからと無理に出られて、温室で一緒に撮影された。これが恐らく候の寫眞の一番最後のものとなつたのであらう。

「最後の筆録」を抱いて

其頃はモウ大分病状は悪かつたのであるが、侯の氣性としてドウしても引込んで居られぬ。傍の方々は獨り氣を揉むばかりで仕方が無かつたらしい、筆者はこれを察したら、成る可く遠慮するやうにして居ると、邸から程遠からの筆者の宅へ、態々使を寄こされて召集されると云ふ始末で、これには一寸閉口した。翌二十三日、噫、此九月二十三日こそは我が「大隈侯昔日譚」に取つては永遠に記憶すべき「最後の日」となつたのである。

丁度其日は激しい秋雨の日で、朝から何となく陰惨な氣持ちの日であつた。矢張り侯よりの迎ひに依て、表の書齋で侯の談話を筆記してゐると、頼母木代議士がドアを開けて入つて来て、侯爵に向つて頻りに絶對静養の必要を勸説した、然し侯はイツカナ聽かれず「ナニ、我輩の身體は醫者がよく知つて居る、少し話しをせんと不可ぬのである、今日も午からこゝへ全國中等學校の劍道選手が來るから、大演説をやるんである、我輩もこれで若い時は大分やつたんだ」と劍を振る

手真似で「却々勇氣凜々たるものである、頼母木氏が出て行くと「又押し込めるかも知れぬからウンと話して置かう、種が切れては君が困るだらう」とばかりの大車輪、筆者はノートを取りながらも氣が氣で無い。

侯に別れて室外に出ると、信常襲侯と頼母木氏とが額を鳩めての心配「ドウも君が居つては不可ぬ、宅に居ると召集されるから、何處かに旅行でもして居らぬとにしてくれ、少し静養せられないと大變悪い、夫人も心配されて居られるから」との話し、そこで自分は爾來、早稻田邸には寄り付かず、旅行して不在と云ふことにした。然し聞き貯めた譚材で其後約二十回ばかり掲載を續けることは出來たが、此日即ち大正十年九月二十三日、噫、此日、正午頃侯爵に別れを告げて、書齋の入口で右と左とに別れた。これが實に侯と自分との最後、永遠の別れとなつて了つたのである。遂に筆者は旅行と稱して、侯を欺いた結果になつた。これもモウ取り返しがつかぬ。

此日は恰も秋季皇霊祭で、早稻田大學で、本社後援の、全中等學校劍道優勝試合の催された日、正午に早稻田邸で、老侯の各選手に對する演説のあるプログラムであつた。然し折柄の大雨で甚しく混雑したのと、侯は床に入られて眠られたとのことで、遂に出られぬこととなり、信常氏が代つて出られ記念撮影だけした。午後の一時からは奥の書院で文明協會の時局研究會が催されたが、これも侯は出席にならなかつた。

此日、此時、筆者と書齋に別れたる老侯は、居室の病床に臥した其まゝ、遂に再び起だすなつて了つたのである——後で聞くと二十五日に澁澤男が渡米の御別れに来て一寸會はれたとのこと——以後は病臥のまゝ、絶對安靜、極く近親の人二三が、病床に行つたのみであつた。

— 英雄、時代を造るか —

其後約二十回連載すると侯の譚材は盡きて了つた。そこで筆者は窮餘の一策、嘗て老侯の帷幕に參じて、名聲天下に鳴りたる、龍溪矢野文雄翁の許に走り、助太刀を乞ひ、所謂番外記事として紙面を埋めた、實を云ふと此時はものゝ十日も経てば、侯の健康は恢復する位に思ふて居た。恐らく侯も未だ其の時は同様に思はれて居たに相違ない。何でも其時候は、傍の人に此稿の事に就て聞かれたので其人は「矢野さんが變つて話して居られます」と答へたら「ウム、矢野君の話なら面白からう」と云はれたとのことであつた。

其後も旅行と稱して、筆者は早稻田邸には餘り行かなかつた。丁度十月十七日に同業數子と筑波山に旅行して歸途、上野驛からの省線電車に乗つて、夕刊を見て初めて侯の重態の發表を知つて驚いた。爾來悲しみ交々到つて、侯の容態は次第に峻に陥つた。丁度少し小康をいられた頃の十二月十九日に大隈家から小宅へ使が來られて「一寸來てくれ」とのことであつた。翌二十日の午前に行つて

見ると、信常氏が「大分いゝやうでもあるし侯爵も君に逢ひたいと云はれるから二三日中に其つもりで居てくれ」とのことであつた。信常氏の話では矢張り此稿の事が氣にかゝるらしい模様であつた。後で聞くと此時候は病床で「松枝と相馬——大觀記者——を呼べ」と云はれたが、主治醫が心配して、様子を見て二三日中にすることになつて居たのであると。

然るに未だ其事を果さざる裡、二十三日頃から、例の膀胱出血があつて又大騒ぎとなつた。而して遂に今日となつて了つたのである。あゝあの時逢つて居たらばと、今となつてはこれも歸らぬ恨事となり終つた。

斯くの如くにして本稿は、侯自らの「大隈侯昔日譚」より、轉じて矢野文雄氏の侯に對する「大隈侯昔日譚」となつて了つた。因縁奇なりと云ふ可きか、丁度矢野氏の談話の掲載が完結する日の拂曉、侯は遂に歸らぬ旅路の人となられた。馳せ付けられた矢野氏と早稻田邸の玄關で逢つた。矢野氏は無言で唯黙禮された

のみ、其面上には無限の感慨が溢れて居た。

筆者が殊に憾みとする所は、侯の談話筆記が、未だ充分に侯の意を満足せしむるに足らなかつた一事である、餘りに時代をかけ離れた筆者には、初めの間はドウも萬事呼吸が呑み込めなかつた。嘸不満足であつたらうと思はれるが、然し如何なる間違ひをしても失策をしても、一度として侯爵が叱られたり、小言を云はれたと云ふことは無い。大分慣れて来て「ウム、ソロ／＼よくなつて来たナ一年位やるか」と云はれ出した頃、遂に後を續くる能はざるに至つたこと、此一事は洵に遺憾である。筆者に取つては好個の記念となつたが、此大偉人の「最後の筆録」たるには、餘りに筆者は、逝ける老侯に對して相濟まぬ氣がするやうである。然し老侯は決して叱らぬ人、愚痴を云はぬ人である。あの温容に莞爾として、我罪を許し給ふことを、我れは獨り信じて疑はぬ。今後尙ほ侯自らの「昔日譚」に非ずして、侯に對する各方面の「昔日譚」を蒐めざる可らざるに至つた事は、筆

「最後の筆録」を抱いて
者に取ては誠に悲痛の極であるが、唯一個の新聞記者として、涙を呑んで此業を
續ける。

英雄時代を造るか、時代が英雄を造るか、永久に解く能はざる一大謎である
が、時代に依つて生れ、而して次の時代を造つたる侯の如きは、蓋し一大偉傑た
るを失はぬ、英雄か偉傑か、そは評者の評に任せんも、其「最後の筆録」の筆者
たる自分は、萬感交々胸に迫つて、今宵眠らんとするも遂に眠る能はず、思ひ出
づるまゝに筆を走らして此稿を草す。静寂の早稲田の夜は將に明けなんとして、
鶏鳴は曉を告ぐるも、モウ、あの雄大な老侯の、國民に曉を告ぐる警世の聲
を聞くことは出来ぬ。——一月十一日拂曉五時——

□
——護國寺畔に佇みて——

丁度一月の十日、それは白皚々たる雪の朝であつた。早稲田の森は時ならぬ六
花に開くる、此晨の拂曉四時半、遂に侯は静かに永遠の眠りに就いた。其夜自分
は、侯が平素起居せられた居室の一隅に横はつて、今は骸と化したる侯に最後の訣
別をなした。其處には近親の人々が通夜をせられて居た。看護婦の手に依つて除
られた白布の其下に現はれた、死の侯の面貌、さながら生けるが如く、其神々し
さ、平和な面ざし、……自分は居室を出ると、何とも云ひ知れぬシヨクを感じ
ざるを得なかつた。死の前には理窟は無い、自分は數年前、一人の父を失ひたる
時と、此日此時程、云ひ知れぬ衝動を得たことは無い、夜半自宅に歸つたが寢就
かれぬまゝ、終夜ベンを走らせて、感懐を録し、報知紙上の「昔日譚」欄に埋め
たのが、右に掲げた一文である。

自分は故侯の知遇を得て報知社に入りて一年有半、書きたいことは山とあるが
私事を以て此書の領域を侵すは、聊か當らずと思ふ故に、そは他に譲るとする。
此書以外に自分が侯の警咳を筆録したるものが優に一卷となるものがある。之は

「最後の筆跡」を抱いて

「隈侯片鱗」と題して、近々公けにするつもりである。

自分は大正七年の七月に早稻田の校門を出で、から、時事新報より大正日々へ大正日々の瓦解より報知新聞へと、其間皆奇妙に一年宛の過程である。これを自分の新聞記者生活の小學校とすると、今第三期に在る。一年宛目に可成りの變轉に逢遭して居たが、第三期目の一年有半で、今度は「侯の死」と云ふ、又々自分に取つては大きな事件に逢着した。時の流れの旋律が、如何にもデリケートに動く神の攝理を、自分は今更ながらに、不思議に感ずる。

即ち此書は私の新聞記者生活第三期の産物であり、故侯の知遇に報ゆるせめてもの記念となつた。

私は今、城北護國寺墓畔に立つて居る、春雨はしとくと降る、昨夜から今晩にかけて、原稿整理の終末を告げて序文まで書き終つた。私は今其脱稿を故侯の靈に告げて、其間墓参をすら怠り勝ちになるの止む無きに至つた其罪をも併せて

謝する、本書は生るゝが、生みの親たる侯の腕に抱かるゝことはモウ永久に無い育ての親たる私は今、雨の護國寺墓畔に立つて、此一文を草して遺兒の成長を故侯に告げる。

大正十一年三月四日

侯遊いて五十四日目の朝

雨の護國寺墓畔に佇みて

保 二 記

遺稿さゝぐ墓新らしき春の雨

「最後の筆跡」を抱いて

報知新聞記者 松枝保二改編

近刊 大隈侯昔日譚 前編

嘗て明治二十六七年頃一郵便報知新聞一紙上に連載されたる『大隈伯昔日譚』を骨子として最近の『大隈侯昔日譚』の編者が改編したもので、曩の『大隈伯昔日譚』は非常に固い漢文体の議論文になつて居るが、編者は之を全く老侯の談話体に改め尙ほ生前の侯から直接編者が命せられて居た諸點を訂正増補したもので、侯の少年時代から明治六年の征韓論破裂までを收めてある。今次の『大隈侯昔日譚』と當然併せ讀まなければならぬものである。

大正十一年三月廿五日印刷
大正十一年三月廿日發行 定價參圓

編者 松枝保二

發行者 廣瀬憲六

印刷者 畑竹次郎

印刷所 東京市神田區鎌倉町三番地 博信堂

不許 複製

東京市麹町區有樂町貳丁目壹番地

發行所 報知新聞社出版部

電話東京四二〇六五番
電話丸之内自五〇至五四番

終

